

—— 鈴鹿郡関町萩原・古厩 ——

切山瓦窯跡・浦ノ山中世墓（旧萩原裏ノ山遺跡）発掘調査報告

1 9 9 4 · 9

三重県埋蔵文化財センター

## 序

埋蔵文化財は、郷土の歴史、文化を今日に伝える数少ないもののひとつです。これら、祖先の残した歴史的遺産は、貴重な財産として保護され、後世に伝えていくとともに、今後の文化の向上、発展の基礎として活用していかなければなりません。しかし一方で、地域経済の活性化あるいは、住民の生活や安全性の向上のため、各種の公共事業が行われています。

こうしたなかで、三重県埋蔵文化財センターでは、文化財保護行政の一環として、事業予定地内の文化財の確認とその保護に努めてまいりましたが、どうしても現状保存が困難な部分については、発掘調査を実施し、記録保存を図っているところであります。

ここに報告いたしますのは、関インター出入口周辺の交通量の増加及び見通しが悪く危険な部分の解消に対応するために計画されました平成6年度一般国道25号関IC改良工事に伴い、切山瓦窯跡・浦ノ山中世墓の削平される部分で発掘調査を実施した結果であります。この成果が、消滅した遺跡にかわって、郷土の歴史、文化を伝え、活用されることを切望するものであります。

最後に、協議から発掘調査にかけて多大な御理解と御協力をいただきました建設省北勢国道工事事務所、関町教育委員会、地元自治会の方々に心から感謝いたします。

平成6年9月

三重県埋蔵文化財センター

所長 川村政敬

## 例　　言

1. 本書は、三重県が建設省中部地方建設局から委託を受けて実施した、平成6年度一般国道25号閔IC改良工事に伴う切山瓦窯跡・浦ノ山中世墓の発掘調査結果をまとめたものである。

なお、両遺跡はこれまで萩原裏ノ山遺跡とされてきたが、今回の発掘調査によりその性格が明らかになったために、大字萩原字切山を中心とする瓦窯跡を切山瓦窯跡、大字萩原字切山浦ノ山を中心とする中世墓を浦ノ山中世墓と改称することとした。

2. 調査期間は、平成6年7月15日から9月14日である。

3. 調査は、下記の体制で行った。

調査主体　　三重県教育委員会

調査担当　　三重県埋蔵文化財センター　調査第二課　主事　清水正明

調査協力　　閔町教育委員会

地元（萩原・古疑）自治会各位

現場作業　　社団法人中部建設協会

4. 発掘調査ならびに整理・報告書作成にあたっては、下記の方々に御指導・御教示を賜った。記して感謝の意を表したい。（順不同・敬称略）

八賀晋（三重大学）、上原真人（奈良国立文化財研究所）、

江原昭善（船山女学園大学）。

5. 本書の執筆・編集は、清水正明が行い、遺物実測・トレイスについては、業務補助員釜谷美香代・宮本理美が行った。

6. 本書に用いた地図および遺構実測図の方位は、全て座標北を用いた。当調査区は国土座標第VI系に相当する。当該遺跡では、磁北はN 6° 30' W座標北から振れている。

7. 本書で用いた遺構表示略記号は、下記による。

S X ; 中世墓 S K ; 瓦窯 S Z ; 不明遺構

8. 引用・参考文献は、結語の後に一括して掲載した。

9. 本書で報告した記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて管理・保管している。

10. スキヤニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。

各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

# 本文目次

I. 前言 .....	1
II. 位置と歴史的環境 .....	4
III. 切山瓦窯跡 .....	5
1. 遺構 .....	5
2. 遺物 .....	9
3. 結語 .....	14
IV. 浦ノ山中世墓 .....	15
1. 遺構・遺物 .....	15
2. 結語 .....	15

# 挿図目次

I. 前言	
第1図 遺跡地形図 .....	3
第2図 調査区位置図 .....	3
II. 位置と歴史的環境	
第3図 遺跡位置図 .....	4
III. 切山瓦窯跡	
第4図 片山地区遺構平面図と 土層断面図 .....	6
第5図 切山地区遺構平面図 .....	6
第6図 切山地区土層断面図 .....	6
第7図 1号窯前庭部実測図 .....	7
第8図 2号窯・SK31実測図 .....	8
第9図 遺物実測図 (1) .....	11
第10図 遺物実測図 (2) .....	12
第11図 遺物実測図 (3) .....	13
IV. 浦ノ山中世墓	
第12図 遺構平面図 .....	16
第13図 中世墓実測図 (1) .....	17
第14図 中世墓実測図 (2) .....	19
第15図 中世墓実測図 (3) .....	19
第16図 中世墓実測図 (4) .....	20
第17図 中世墓実測図 (5) .....	21
第18図 中世墓実測図 (6) .....	22
第19図 中世墓実測図 (7) .....	23
第20図 遺物実測図 (1) .....	24
第21図 遺物実測図 (2) .....	25
第22図 遺物実測図 (3) .....	26

# 付表目次

III. 切山瓦窯跡	
第1表 軒丸瓦計測表 .....	10
第2表 軒平瓦計測表 .....	10
第3表 遺構別瓦概算表 .....	10
第4表 瓦敷布状況表 .....	14
IV. 浦ノ山中世墓	
第5表 遺物観察表 .....	26
第6表 中世墓一覧表 .....	27

# 写真図版目次

P L. 1 瓦窯跡調査前・後全景	
P L. 2 1号窯前庭部・SK30	
P L. 3 中世墓調査前・後全景	
P L. 4 SK3	
P L. 5 SX5・6 遺物出土状況	
P L. 6 SX11・13 遺物出土状況	
P L. 7 SX14・17 遺物出土状況	
P L. 8 SX20・22 遺物出土状況	
P L. 9 SX24 遺物出土状況	
片山地区全景・調査区近景	
P L. 10 切山瓦窯跡出土遺物 (1)	
P L. 11 切山瓦窯跡出土遺物 (2)	
P L. 12 切山瓦窯跡出土遺物 (3)	
P L. 13 浦ノ山中世墓出土遺物 (1)	
P L. 14 浦ノ山中世墓出土遺物 (2)	
P L. 15 浦ノ山中世墓出土遺物 (3)	

# I. 前　　言

## ◇調査に至る経過

平成6年度一般国道25号関IC改良工事は、3次補正予算を組んだ最終工事であり、平成7年3月15日完成予定をめざして、すでに用地買収及び工事入札が完了し一部分工事に取りかかっていた。

こうしたなかで、当工事現場において、重圓文軒丸瓦と重廓文軒平瓦が住民によって表面採集されて、関町教育委員会に持ち込まれた。

平成6年5月30日、このことについて三重県教育委員会文化振興課より三重県埋蔵文化財センターに連絡があり、早速工事の一時停止を建設省へ申し入れた。5月31日に現地協議を行った後、6月3日・16日に範囲確認調査を実施し、950m<sup>2</sup>について遺構・遺物を確認した。なお、浦ノ山地区の北西側部分については、当初工事予定地外になる可能性もあったため、試掘調査は本調査期間内に実施した。

本遺跡の取り扱いについては、範囲確認調査結果を受けて、6月23日に協議を行い、翌日の24日に「平成6年度一般国道25号関IC埋蔵文化財発掘調査計画書」の提出、7月11日に再び協議を行った後、7月15日付けで委託契約書締結に至った。

当地区出土の瓦については、1975年に古窯の崖崩れの所から重圓文軒丸瓦と重廓文軒平瓦が採集されて以来、1981年の「一志郡嬉野町 天花寺廃寺」、1992年の「鈴鹿郡関町出土の古瓦」、1993年の「伊勢地方における官系瓦の分布」などの調査研究例がある。

## ◇調査の方法

調査範囲は鈴鹿郡関町大字萩原字浦ノ山（旧裏ノ山）・字切山、大字古窯字片山にわたる950m<sup>2</sup>、調査期間は平成6年7月15日～9月14日である。

報告の際には、字浦ノ山（旧裏ノ山）を浦ノ山地区、字切山を切山地区、字片山を片山地区とし、以下使用する。

切山地区については、すでに工事にかかっていたために、工事による擾乱土及び表土を重機によって

掘削した後に、任意の方向に4×4mのグリッドを設定し、人力によって調査した。しかし、後世の擾乱部分が深く、適宜重機も併用した。

裏ノ山地区については、任意の方向に4×4mのグリッドを設定後、全工程人力によった。場所がら、急斜面ではあるが道路際のために土を下にかき下ろせない状況から、排土はベルトコンベアによって横に落とした。

片山地区については、表土を重機によって掘削した後に、任意の方向に4×4mのグリッドを設定し、人力によって掘削した。

## ◇調査の経過

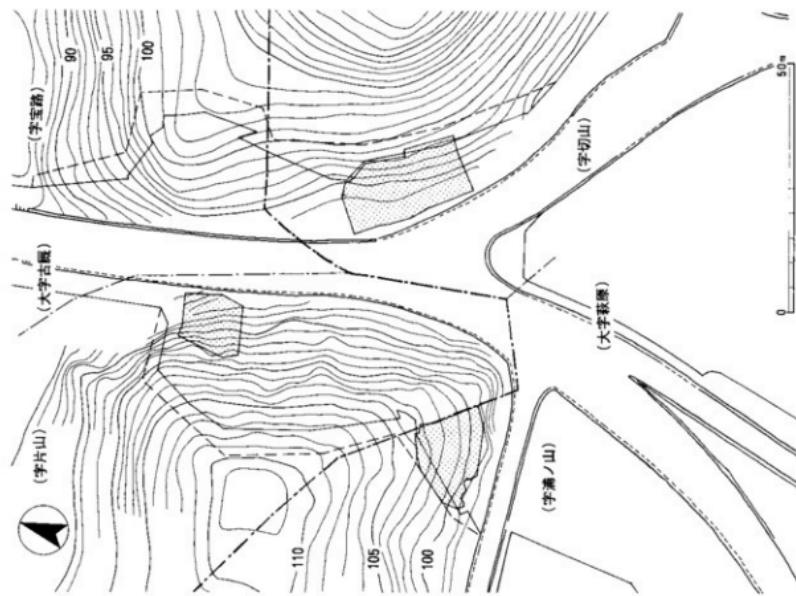
調査全体の流れは、調査日誌（抄）を参照されたい。

### 調査日誌（抄）

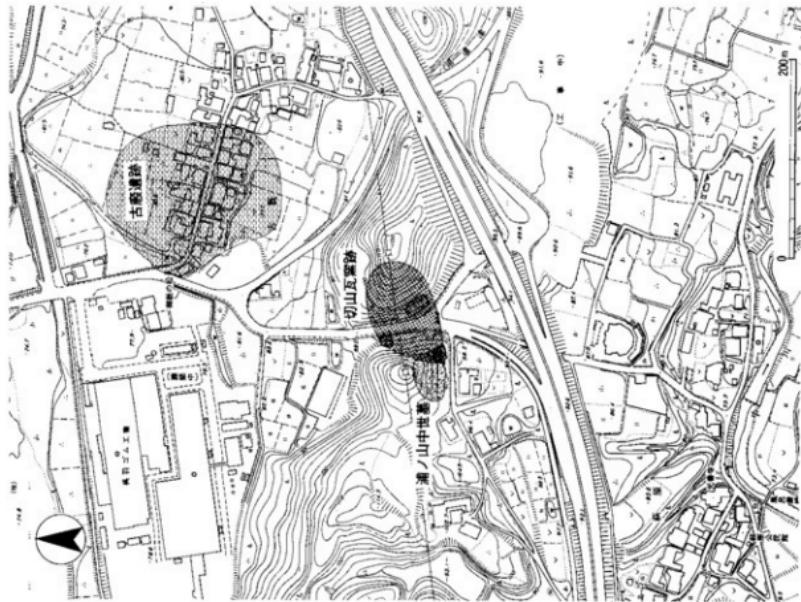
7月15日（金）	本日から調査開始。 切山地区－重機による掘削。 浦ノ山地区－地区杭設定。
7月18日（月）	作業員、本日から。 片山地区－西側を試掘するが、遺構・遺物共に無し。 東側を表土掘削し、N4地区杭付近で瓦出土。 切山地区－地区杭設定。
7月19日（火）	切山地区－擾乱土にトレンチを入れ深さを調べるが深い。 れ
7月20日（水）	切山地区－重機（0.05m <sup>2</sup> ）で擾乱土除去。切り株に手間取る。
7月21日（木）	切山地区－擾乱土をばば除去。 片山地区－表土を除去後、遺構検出。瓦溜1箇所のみ。 写真撮影完了。
7月22日（金）	片山地区－平板測量完了。 現地調査完了。 切山地区－焼土検出。

7月25日（月）	片山地区ー現地引き渡し。 切山地区ートレンチを入れた後掘削し、1号窯前庭部検出。	8月12日（金）	2 基配石検出。 作業員は17日迄休み。
7月26日（火）	1号窯前庭部周辺の遺構検出。	8月15日（月）	試掘時の遺物のカード整理。
7月27日（水）	1号窯前庭部の平面図・写真撮影。	8月16日（火）	遺跡名を検討。
7月28日（木）	切山地区ー土層断面図・写真撮影。 浦ノ山地区ー表土掘削開始。	8月17日（水）	浦ノ山地区ー実測の基準点設定。
7月29日（金）	昼休み、切山地区に洗われた完形平瓦が置かれていた。範囲確認調査以前に、当地区で表面採集されたものと考えられる。 切山地区ー瓦溜検出。 浦ノ山地区ー腐食土層除去及び拔根作業。	8月18日（木）	浦ノ山地区ー中世墓実測。
8月1日（月）	浦ノ山地区ー腐食土層除去及び拔根作業。	8月19日（金）	切山地区ー2号窯前庭部平面図。
8月2日（火）	切山地区ー瓦溜掘削。 拔根作業。	8月22日（月）	切山地区ー2号窯前庭部の土層図。
8月3日（水）	（浦）ベルトコンベアー搬入。	8月23日（火）	切山地区ー西側トレンチの続きを。
8月4日（木）	（ノ）T 2で四耳壺出土。 （山）R 2付近に瓦出土。	8月24日（水）	切山地区ー1号窯前庭部掘削。
8月5日（金）	（）四耳壺・常滑の壺出土。	8月25日（木）	浦ノ山地区ーT字状にトレンチ。
8月8日（月）	切山地区ー瓦溜掘削。瓦溜下部が窯前庭部の可能性。 浦ノ山地区ー7割を粗削。	8月26日（金）	浦ノ山地区ーベルコン撤収。
8月9日（火）	切山地区ー土層断面観察により、瓦溜(SK31)下部が窯前庭部であることを確認。 (2号窯前庭部)	8月29日（月）	切山地区ー1号窯前庭部完掘。
8月10日（水）	浦ノ山地区ー西側にトレンチ掘り。 切山地区ー1号窯前庭部にT字状にトレンチ掘り。	8月30日（火）	浦ノ山地区ー土坑検出作業の続きを。
	浦ノ山地区ー7割を粗削を終了。 あぜの土層断面図。	9月1日（木）	切山地区ー清掃後、写真撮影。
8月11日（木）	切山地区ー1号窯前庭部のトレンチの続きを。 浦ノ山地区ーあぜ外し。	9月2日（金）	浦ノ山地区ー遺構実測の続きを。
		9月5日（月）	PM.1:00~建設省関係行事見学会。
		9月6日（火）	切山地区と裏ノ山地区的平板実測。
		9月8日（木）	切山地区ー1号窯前庭部完掘。
		9月9日（金）	浦ノ山地区ー土坑検出作業。
		9月12日（月）	浦ノ山地区ー瓦溜出作業の続きを。
			三重大学八賀教授・県文化振興課 ・閏町教育委員会来訪。
			9月5日（月） 中世墓完掘写真・図面・コサック。
			9月6日（火）・7日（水） 瓦包含層掘削の続きを。
			9月8日（木） 瓦包含層掘削・遺構検出作業。
			9月9日（金） あぜの土層断面。
			9月12日（月） あぜ外し。
			重機による断ち割り。調査完了！

第2図 調査区位置図 (1 : 1,000)



第1図 通称地形図 (1 : 5,000)



## II. 位置と歴史的環境

切山瓦窯跡及び浦ノ山中世墓は、鈴鹿山脈の最南部の鈴鹿川上流と中ノ川上流とに挟まれた丘陵上に位置し、切山瓦窯跡は大字古殿から大字萩原にかけての鞍部を南北にはしる町道の東側斜面、浦ノ山中世墓はその町道の西側斜面にある。

両遺跡の北東約200mの辺りに古窯の集落があり、南西約400mの辺りに萩原の集落がある。

両遺跡周辺は古くから畿内と東国を結ぶ交通の要衝として発達した地域である。両遺跡は、弥生時代から鎌倉時代にかけての複合遺跡で古代駅制の鈴鹿駅比定地である古殿遺跡（2）に隣接し、鈴鹿川の対岸には、古代三関の一つの鈴鹿関（17）がある。鈴鹿関は789年には廃闢となつたが、その後も有

事の際には幾度も閉じられており、依然として交通の要衝としての重要な役割を果たしてきた。

一方、鈴鹿川の北側閻門町新所町には平安初期に創建されたと伝えられる地蔵院（通称閻の地蔵）があり、その付近は門前町として栄えた。また、中ノ川の南側芸濃町楠原には、鎌倉末期に阿弥陀如来立像や地蔵菩薩立像が刻みつけられた石山觀音があり、当遺跡周辺は仏教色の濃い地域でもあった。

両遺跡の中心である「萩原」の名が文献上登場するのは、文亀三年（1503年）の万松山水明禪寺懶法僧衆帳（端光寺藏）で、「萩原妙貞禪尼」の名が記される。



◆弥生～中世 ▲奈良・平安 ○古墳・鎌倉 ●奈良・中世 △中世

第3図 遺跡位置図 (1:50,000) [国土地理院「鈴鹿峠」「平松」「桜本」1:25,000より]

- |             |            |           |             |             |
|-------------|------------|-----------|-------------|-------------|
| 1. 切山瓦窯跡    | 2. 古窯遺跡    | 3. 小野遺跡   | 4. 木崎遺跡     | 5. 木崎B遺跡    |
| 6. 小野北遺跡    | 7. 大日森遺跡   | 8. 西沼遺跡   | 9. 会下A遺跡    | 10. 端光寺跡    |
| 11. 関特社周辺遺跡 | 12. 下門田遺跡  | 13. 正法寺山莊 | 14. 楠原童子谷城址 | 15. 楠原向市場城址 |
| 16. 林城屋敷城址  | 17. 鈴鹿関推定地 |           |             |             |

### III. 切山瓦窯跡

#### 1. 遺構

切山地区は、標高92~98mで西向きの斜面である。当地区は、近年新たな植林が行われ、その後道路改良工事も既に進んでいた状況であった。当地区では、明黄褐色シルト質細砂の地山上で瓦窯2基（1・2号窯）と瓦溜2基（SK30・31）、それに灰原を検出した。

片山地区は、標高95m前後で東向きの斜面である。層序は表土と砂礫混じりの黄褐色土（地山）である。当地区では、瓦溜1基（SK32）を検出した。

浦ノ山地区は、標高99~104mで南向きの斜面である。層序は表土と黄灰色細砂（中世墓整地層・瓦包含層）・灰黄色細砂（地山）である。当地区では、瓦溜1基（SK33）を検出した。

##### (1) 1号窯

前庭部のみ検出した。焚き口及び窓体部分は、調査区外に存在すると考えられる。

前庭部の掘形は、幅約4.6m、地山上面からの深さ約1mである。長さは、2.8mのみ検出したが、焚き口側は調査区外であり前庭部の先端部は削平されていた。掘形底部と炭層との間に褐色土が一樣にある。地山を掘りその上に褐色土を敷き硬めた後に操業したと考えられる。また、中央には幅約40~60cm、深さ約20cm断面形U字状を呈した排水溝がある。

炭層は、大略5層に分けられる。

下から、1層目は厚さ約8~18cm、2層目は厚さ約4~8cm、3層目は厚さ約8~12cm、4層目は厚さ約4~6cmである。この層中からは、軒丸瓦（2）が出土した。5層目は、厚さ約8~12cmあり、その上面で軒平瓦（10・11）が出土した。

##### (2) 2号窯

S K31（瓦溜）に切られてはいるが、前庭部の底を部分的に検出した。焚き口及び窓体部分は、調査区外に存在すると考えられる。検出できた前庭部の掘形は、幅約2.8m、長さ約2.4m、地山上面から

の深さ約1.2mである。調査区の断面観察では、掘形の幅が約1.2mと狭くなっている、焚き口近くであろうと判断できる。

炭層から、平瓦12枚分、丸瓦4枚分が出土した。

##### (3) その他の瓦窯跡

1号窯の上部斜面の約7mにわたって灰原を検出した。従って、調査区外に、1号窯とは別の瓦窯跡が1基以上存在することが考えられる。

灰原には瓦片も多く含まれていた。6月3日の範囲確認調査の折に土糞袋にして10袋分の瓦を表面採集したが、その多くは、この灰原から重機によって削り落とされたものであろう。

##### S K30（瓦溜）

1号窯の斜め上方斜面で検出した。平面形は一辺が約1.2mの隅丸方形で、深さは約1.0mである。平瓦約16枚分、丸瓦約3枚分が出土した。

##### S K31（瓦溜）

2号窯の前庭部を切っている。調査区内での平面形は長径約5m、短径約4.2mの楕円形で、深さ約1.2mである。但し、調査区外へも延びる。平瓦約46枚分、丸瓦約11枚分が出土した。

##### S K32（瓦溜）

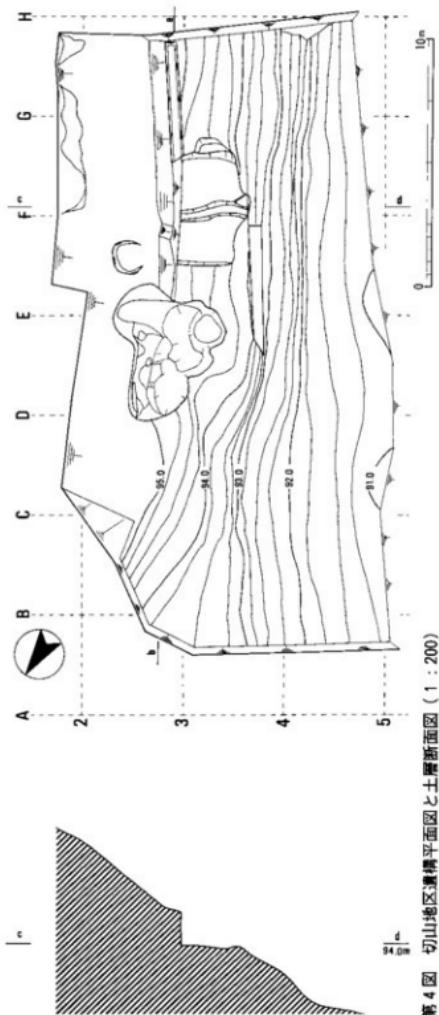
片山地区で検出した。平面形は一辺が0.6mの隅丸方形で、深さは0.3mである。平瓦約6枚分と丸瓦約1枚分が積み重なった様な状態で出土した。

##### S K33（瓦溜）

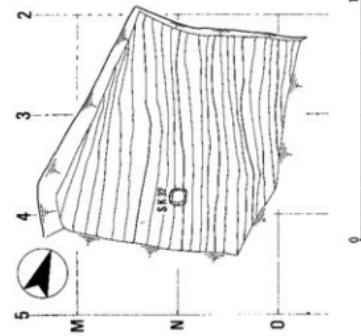
浦ノ山地区で検出した。調査前は、崖部分であり、瓦が積み重なった様な状態で露呈していた。平面形は長径約1.6m、短径約1.0mの楕円形を半分にした形で、深さ約0.3mである。

平瓦約20枚分、丸瓦約4枚分が出土した。

また、浦ノ山地区の中世墓の整地層に、平瓦約20枚分、丸瓦約6枚分を包含していた。



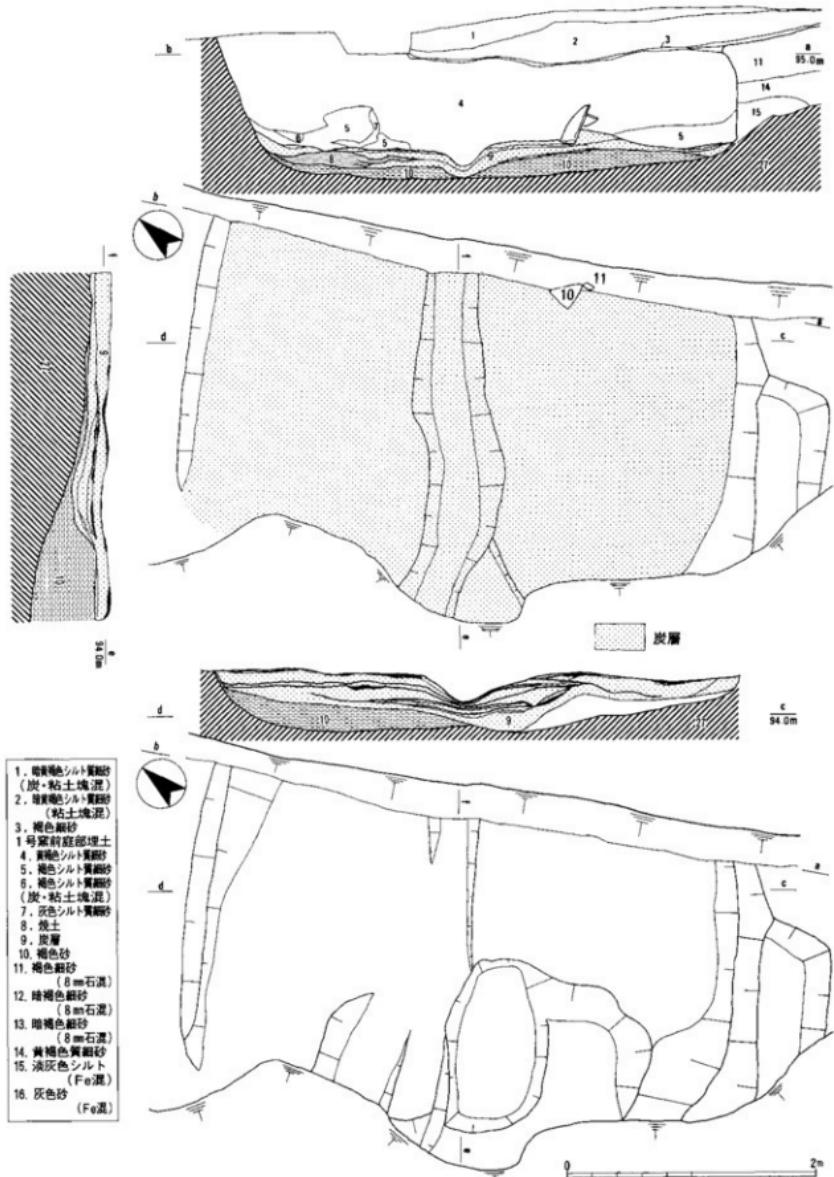
第4図 切山地区連続平面図と土層断面図（1:200）



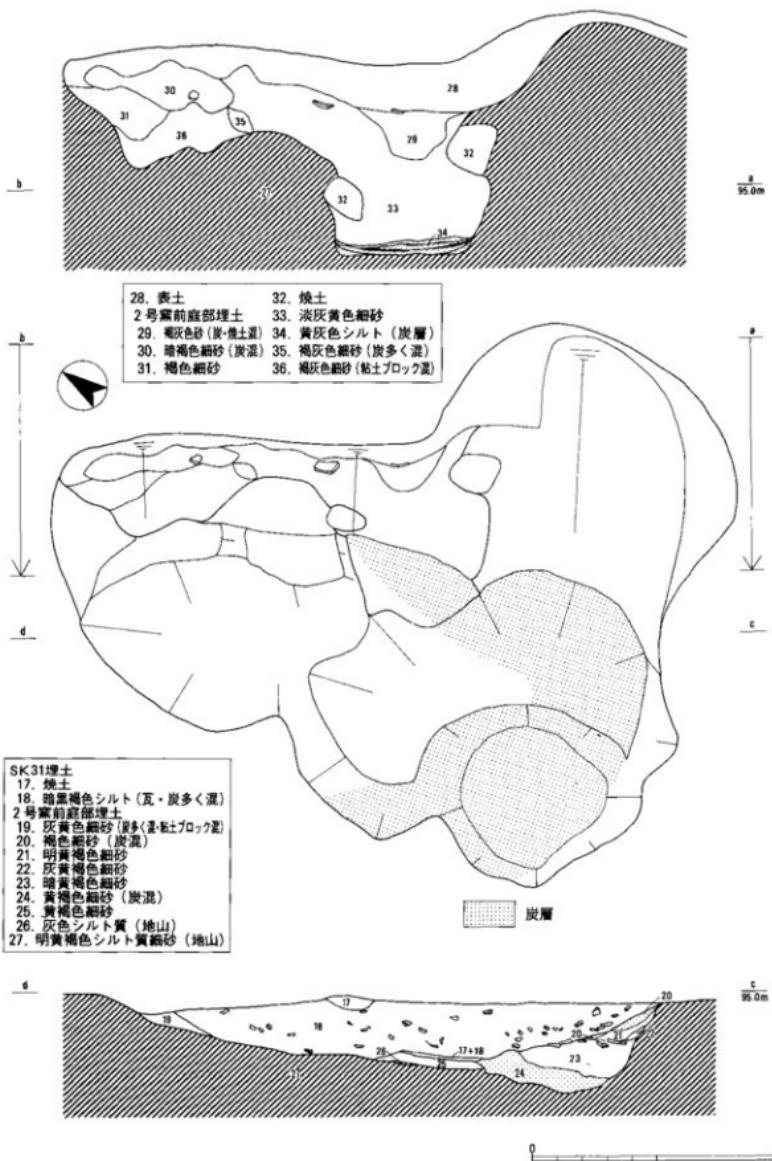
第5図 片山地区連続平面図（1:200）



第6図 切山地区土層断面図（1:80）



第7図 1号窓前底部実測図 (1:40) [上図: 前底部5層目検出時、下図: 前底部1層掘り上がり]



第8図 2号案・SK31 実測図 (1 : 40)

## 2. 遺 物

### (1) 1号窯出土遺物

#### 軒丸瓦 (1)

二重の圓線を巡らす重圓文軒丸瓦で、深い彫りで圓線の断面形は二等辺三角形である。外縁は二重の圓線と同様の形状であり、三重の圓線を巡らすと言つた方が適切である感がある。

瓦当径の幅は約17.3cm、高さは推定約16.9cmを測る。瓦当部の側面下側がやや潰れたように歪んでいて正円形ではない。瓦当部には、粘土積み上げ痕が見える。瓦当裏面は、台形状を呈し、へら状の工具で整形後ナデ調整する。

色調は淡灰褐色を呈し、焼成はやや軟である。

#### 軒平瓦 (10・11)

重廓文軒平瓦であり、ほぼ完形で出土した。これらは、同范と思われる。外縁断面形は丸みをもち、弧線とほぼ同じ高さのものである。

軒平瓦(10)は、瓦当部の幅約29.1cm、厚さ約3.5cm、平瓦部の狭端部幅約26cm、狭端部厚約2.3cm、全長約39.8cmを測る。

軒平瓦(11)は、瓦当部の幅約27cm、厚さ約3.5cm、平瓦部の狭端部幅約25.7cm、狭端部厚約2.1cm、全長約38.2cmを測る。

頸は曲線頸で、横位にヘラケズリ後、ナデ調整する。平瓦部凸面は、頸から縦位にヘラケズリ後ナデ調整する。凹面は斜方向に糸引き痕が残っている。側面は、凸面側を瓦当から狭端部に向かって面取りする。狭端部は、ヘラケズリする。部分的ではあるが、瓦当面から約1cmくらいの所の頸側に、ひび割れが窺える。

色調は淡橙色を呈し、焼成は軟である。

これらの瓦は、焼成が甘く、再度焼成するために、前庭部に置かれていた可能性も考えられる。

#### 平瓦 (15)

狭端幅約21cm、狭端厚約2.1cm、現存長約25cmである。

凸面に、縦位に網目がそのまま残る。凹面は、糸引き痕・布目压痕が残る。一枚造りと思われ、側面は粗い削りが施される。

色調は、灰色を呈し、焼成は硬である。

### (2) SK31(瓦窯)出土遺物

#### 軒丸瓦 (3)

二重の圓線を巡らす重圓文軒丸瓦の、瓦当部のみの破片であるが、瓦当部には、粘土積み上げ痕が窺える。圓線は、非常に低い。

色調は淡灰褐色を呈し、焼成はやや軟である。

#### 軒丸瓦 (13)

丸瓦部玉縁付近の破片であるが、厚さが約2.3cmと厚く、軒丸瓦の丸瓦部分と思われる。

また、凹面から側面にかけて布目压痕が連続してみられ、一本造りと思われる。

色調は淡灰褐色を呈し、焼成はやや軟である。

#### 軒平瓦 (6)・(7)

重廓文軒平瓦であり、軒平瓦(10)(11)と同范と思われる。

厚さ約1.5cm前後の瓦当部のみの破片である。

色調は淡灰褐色を呈し、焼成はやや軟である。

#### 丸瓦 (12)

筒部端面の幅約14.6cm、高さ約5.2cm、厚さ1.7cm、玉縁部端面の幅約10.2cm、高さ約7.2cm、厚さ1.7cm、全長約40.6cmである。

段部凸面は丁寧に削られる。分割截面は内側から0.7~1.6cmを測り、分割破面は未調整のままである。

色調は、灰色を呈し、焼成は軟である。

#### 平瓦 (16)

平瓦(15)と同様の成形・調整技法と思われる。

色調は淡灰褐色を呈し、焼成はやや軟である。

#### 須恵器壺 (8)

奈良時代後半の長頸壺と思われる。高台径は、約8.4cm。外面は、体部下半分から底部にかけてはケズリ後ナデ仕上げである。

色調は、暗灰色を呈し、焼成は硬である。

#### ◇包含層出土遺物

#### 軒丸瓦 (2)

二重の圓線を巡らす重圓文軒丸瓦の瓦当部と丸瓦部の破片である。瓦当部には、粘土積み上げ痕が窺える。圓線は、低い。

色調は淡灰褐色を呈し、焼成はやや軟である。

#### 軒丸瓦（4・5）

二重の圈線を巡らす重圈文軒丸瓦である。外縁断面形は、軒丸瓦（4）は丸みをそびえ、軒丸瓦（5）は四角形を呈する。高さは、圈線とほぼ同じである。軒丸瓦（5）の圈線は、細くシャープである。

軒丸瓦（4）は、瓦当径約15.4cm、瓦当部の厚さ約3.6cm、現存長約20cmを測る。

軒丸瓦（5）は、瓦当径約16.5cm、高さは推定約14.2cmを測る。瓦当側面下側に布目压痕があり、正円形ではない。

その他の成形・調整技法は軒丸瓦（1）と同様であるが、軒丸瓦（4）の瓦当裏面は、軒丸瓦（1）と比べると約1.5cm程幅広い。

軒丸瓦（4）の色調は灰色を呈し、焼成は硬である。軒丸瓦（5）の色調は淡灰褐色を呈し、焼成はやや軟である。

#### （3）表面探集遺物

##### 軒平瓦（9）

重廓文軒平瓦であり、軒平瓦（10・11・6・7）

と同范と思われるが、更に外側にコの字状に外縁を巡らせる。

瓦当部の幅約29cm、厚さ約4.1cm、現存長約25.3cmを測る。

顎は軒平瓦（10・11）とは異なり、直線顎である。平瓦部凸面は、殆ど瓦当から縦位にヘラケズリ後ナデ調整するが、部分的に瓦当面から2cm程控えた所からヘラケズリする。凹面は、布目压痕をへら状のもので横位に擦り消す。側面は、凹面側を瓦当から狭端部に向かって面取りする。

もし、顎の部分と側面を更に削れば、軒平瓦10・11と同じ瓦当部になると思われる。

部分的ではあるが、軒平瓦10・11同様、瓦当面から約1.0cmくらいの所の顎側にひび割れが窺える。

色調は、黄灰色を呈し、焼成は、硬である。

##### 平瓦（14）

広端部幅約24.4cm、狭端部幅約22.6cm、長さは約32.2cm、厚さ2.8cm前後で完形である。

平瓦（15・16）と同様の成形・調整技法と思われる。側面・端面は削っている。

色調は、暗灰色を呈し、焼成は、硬である。

個 体 番 号	瓦 当 面								全 玉縁部		
	直 番 号	瓦 径 厚 径	第一圈		第二圈		外 縁			幅 高	幅 高
			内 幅 高	内 幅 高	内 幅 高	内 幅 高	内 幅 高	内 幅 高	内 幅 高		
1	11.3 (11.9)	2.8 (2.8)	0.7 (0.6)	0.6 (1.1)	1.1 (1.2)	0.6 (0.6)	0.55 (0.57)	0.5 (0.56)	— (—)	— (—)	— (—)
2	—	—	—	—	0.1 (0.2)	0.4 (0.6)	0.1 (0.1)	— (—)	— (—)	— (—)	— (—)
3	—	(4.1)	—	—	— (—)	0.65 (0.6)	0.3 (0.3)	0.65 (0.6)	0.2 (0.2)	— (—)	— (—)
4	15.4 (15.2)	3.6 (3.6)	0.5 (0.5)	0.5 (0.5)	10.5 (10.5)	0.5 (0.5)	0.2 (0.2)	0.3 (0.3)	0.2 (0.2)	— (—)	— (—)
5	16.4 (16.2)	2.5 (2.8)	0.4 (0.5)	0.2 (0.2)	9.5 (9.5)	0.4 (0.55)	0.25 (0.25)	10.3 (10.3)	1.1 (1.1)	0.3 (0.3)	— (—)

第1表 軒丸瓦計測表（単位：cm）

個 体 番 号	瓦 当 面								全 狹端部		
	幅 厚 弦 号	幅 厚 弦 号	第一圈		第二圈		外 縁			幅 厚 弦 号	幅 厚 弦 号
			内 幅 深 幅	内 幅 深 径	内 幅 高	内 幅 深 径	内 幅 高	内 幅 深 径	内 幅 高		
9	20 (21)	4.1 (4.1)	1.5 (1.5)	1.5 (1.5)	1.45 (1.45)	0.4 (0.4)	0.35 (0.35)	1.5 (1.5)	0.2 (0.2)	0.4 (0.4)	0.6 (0.6)
10	21 (21)	3.5 (3.5)	1.5 (1.5)	1.5 (1.5)	1.49 (1.49)	0.3 (0.3)	0.35 (0.35)	— (—)	— (—)	0.4 (0.4)	0.1 (0.1)
11	20 (20)	3.5 (3.5)	1.5 (1.5)	1.5 (1.5)	1.42 (1.42)	0.3 (0.3)	0.3 (0.3)	1.05 (1.05)	0.4 (0.4)	0.4 (0.4)	0.1 (0.1)

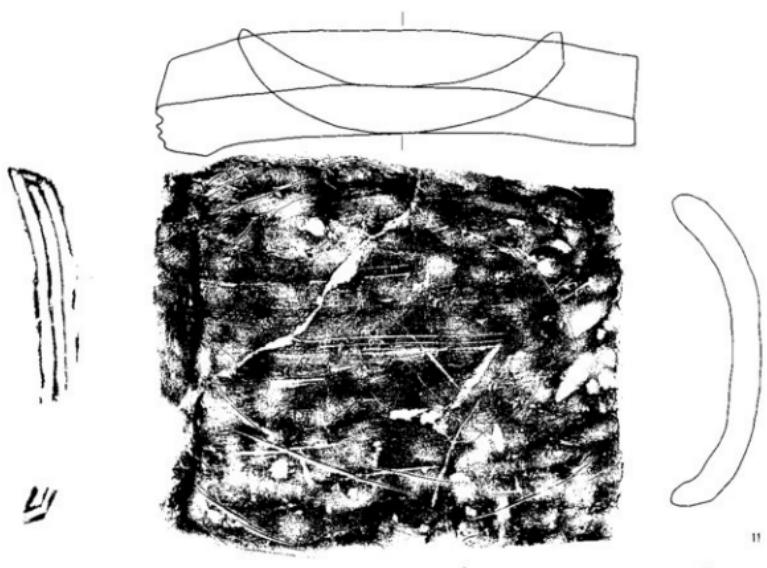
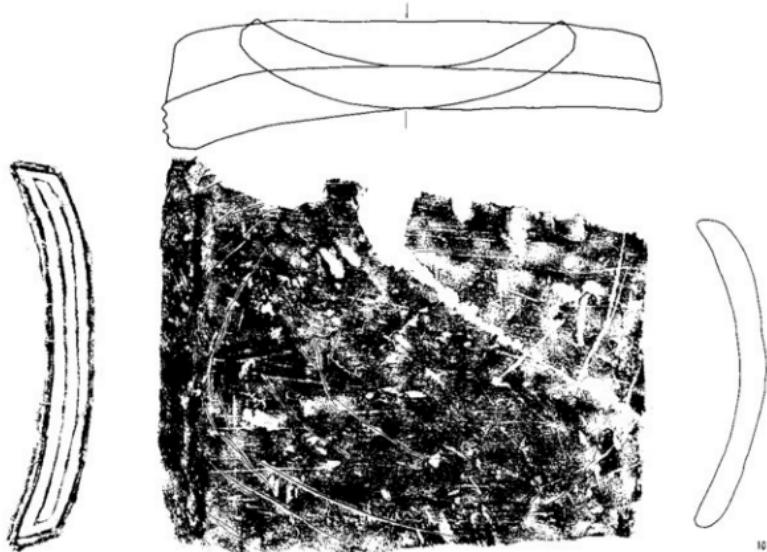
第2表 軒平瓦計測表（単位：cm）

	1号窯	2号窯	S K30	S K31	S K32	S K33	
	丸瓦	微	4	3	11	1	6
平瓦	8	12	16	46	6	20	

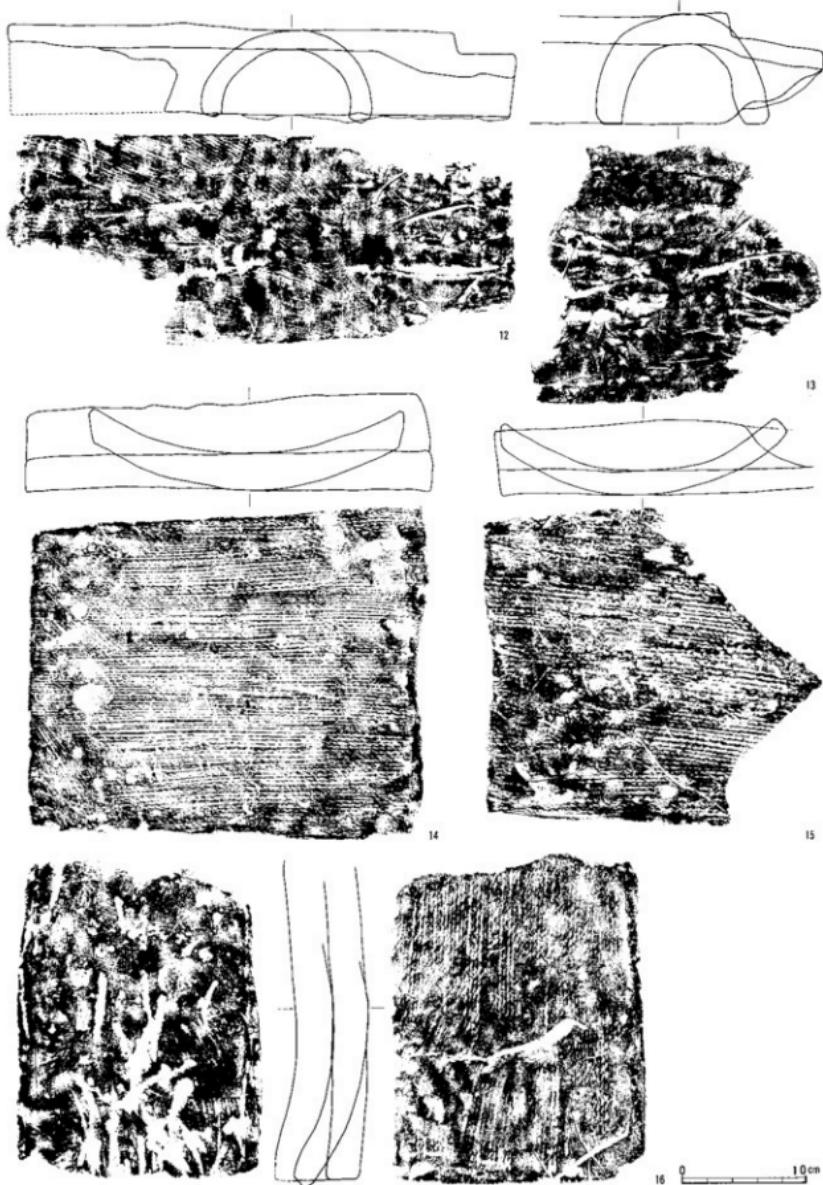
第3表 遺構別瓦概算表（単位：枚、微；一枚未満）



第9図 遺物実測図(1) (1:4)



第10図 遺物実測図(2) (1:4)



第11図 遺物実測図（3）（1:4）

### 3. 結語

切山地区では、3基以上の瓦窯跡を確認できた。1号窯と2号窯の新旧は不明であるが、それより上層に灰原があり、若干新しい窯が1基以上あることが確認できた。

出土瓦の新旧関係については、出土地点における色調・胎土・調整技法等に差異は認められない。たゞ、1号窯出土の軒平瓦10・11は曲線額であり、表面採集遺物である直線額の軒平瓦9に比べるとやや古い様相を呈する。

次に、軒丸瓦と軒平瓦の製作技法について述べる。軒丸瓦の瓦当部と丸瓦部の関係については、軒丸瓦1~5から考察してみる。軒丸瓦1は瓦当部下半分の破片である。軒丸瓦2~5は瓦当部上半分と丸瓦の破片である。これらの割れ方は、瓦当部に粘土積み上げ痕が観察されること、軒丸瓦5の瓦当側面下側に布目圧痕が残ることと考え合わせると、組み合わせ式成形台を使って製作したと考えられている成形台一本造り積み上げ技法によるものと思われる。軒平瓦の瓦当部と平瓦部の関係については、軒平瓦6・7・9~11から考察してみる。平瓦6・7は、厚さ15mm前後の瓦当部のみの破片である。軒平瓦9~11は、若干ではあるが、顎側に瓦当に沿ったひび割れが見える。これらのことから、平瓦の広端部に別粘土をあてて瓦当部を成形したことも考えられよう。丸瓦の製作技法は、丸瓦12でみられるような桶巻き作りである。平瓦の製作技法は、側面に分割した痕跡はなく、全ての瓦が広端面・狭端面に垂直な縄目がみられること、また粘土板合わせ目痕や布目の綴じ合わせ目痕は観察されないことから、一枚造りと考えられる。

それから、この瓦の供給先について述べる。供給先としては、從来から指摘されていて地理的にもつ

とも近い古疑（鈴鹿駅）が考えられる。山陽道諸国の駅舎は瓦葺粉壁であったというが、古疑遺跡で、奈良時代のものと推定される古瓦が出土し、鈴鹿駅が瓦葺きであった可能性が指摘されている。今のところ古疑遺跡で、重圓文軒丸瓦・重廓文軒平瓦は採集されていない。

また、鈴鹿川対岸の鈴鹿関も可能性はある。

他に考えられる所は、鈴鹿川下流に位置する伊勢国府・伊勢國分寺である。両遺跡共に重圓文軒丸瓦<sup>11-14</sup>と重廓文軒平瓦が出土しており、鈴鹿川の当時の水量が十分であれば船による運搬は可能であろうが、從来から指摘されているように当瓦産及び同范と考えられるものはない。

次に、窯の操業時期について若干の考えを述べる。まず前述したように、当遺跡で出土した軒丸瓦・軒平瓦・平瓦・丸瓦共に、出土地点における色調・胎土・調整技法等に差異は認められなかったこと。出土した軒瓦は、重圓文軒丸瓦と重廓文軒平瓦のみであること。聖武天皇の当地への幸行が740年であり、それと何らかの関係が考えられる瓦作りが鈴鹿をはじめ県下各地で確認されていること。789年に閑の廢止がなされていること。平城宮出土軒瓦編年表では、重圓文軒丸瓦・重廓文軒平瓦は天平初頭頃～神護景雲元年に比定されている。

以上のことから、操業時期は8世紀後半という比較的短いものであったと考えられる。

さて、窯が検出されなかった浦ノ山地区において、瓦溜（SK33）を検出し、またその周辺の中世墓の整地層には、土囊袋にして4袋分の瓦を包含していた。従って、SK33の周辺の奈良時代の遺構が中世に破壊された可能性が考えられよう。

	A	B	C	D	E	F	G	R	S	T	U	V	W
1	—	—	—	—	—	—	微3	—	微1	0	0	0	—
2	微2	1 3	微4	1 4	1 5	1 6	微2	微3	2 2	微1	0	—	—
3	微微8	8	微2 0	2 0	4 5	4 5	微1	0 0	微1 0	0 2	0 0	0 0	0 0
4	微1	1	微2	2	微1	4 5	1.	—	0 0	微3	0 0	0 0	0 0

第4表 瓦散布状況表（単位：枚、微；一枚未満、上段：丸瓦、下段：平瓦）

# IV. 浦ノ山中世墓

## 1. 遺構・遺物

浦ノ山中世墓は、標高99~104 m、南向きで概ね20°の斜面上にある。層序は表土と黄灰色細砂（中世墓整地層・瓦包含層）、灰黄色細砂（地山）である。

現況は、山林で多くの川原石が散在していた。調査に際しては、川原石が旧状を保っているか否かに気付けながら注意深く抜根・掘削していった。

調査の結果、24基の中世墓を検出した。

中世墓の構造は、川原石で（方形に）区画された中心部に火葬された骨が入った藏骨器が納められる配石墓である。

その中で、とりわけS X 3が注目される。

配石は長方形を呈し、東西約2 m、南北約1.5 mと推測する。

そして、そのほぼ中央に平面形が長軸70cm、短軸55cmの梢円形で、深さ23cmの土壇を検出した。

土壇中からは、常滑産の小甕と蓋として転用した片口鉢が出土した。小甕の肩部分には、時期的には百年程へだたるが、愛知県阿久比町の上芳池窯・福住窯のものと酷似するスタンプ印があり、ほぼ南を向いていた。そして、小甕の中には火葬骨が納められていた。副葬品は出土しなかった。

S X 21は、空風輪（21・22）、地輪（28）、川原石が散在した下に地輪（31）があり、その下に土壇が掘られていた。

S X 7は、調査区外に延びるもので全容は分からなかった。瓶子の破片（8）が出土した。

S X 13は、配石の中央に掘られた土壇と配石の下に山茶椀（10）が伏せられた浅い土壇をもち、複数

埋葬された可能性がある。浅い土壇の埋土には、微量の骨が確認できた。S X 14も、土壇中に伏せられた状態の山茶椀（11）が出土し、その下からは微量の骨が確認できた。これらの山茶椀は、おそらく木製の藏骨器の蓋として使われたものであろう。

副葬品は、S X 4出土の土師器皿細片のみであった。

S Z 2・S Z 10については、配石と思われる石を検出したが、土坑の存在は不明で、遺物などの出土もなく、中世墓として判断するには至らなかった。

出土遺物には、藏骨器とその蓋、石塔等がある。

藏骨器は常滑産が大半で、瀬戸産（5・8）が混じる。蓋は日常雑器を転用したもので、片口鉢（1・3）や山茶椀（10・11）である。

石塔は、全て積組式五輪塔で14点出土した。空風輪7点、火輪は無く、水輪2点、地輪4点である。

石材は肉眼観察によると、全て等粒状黒雲母花崗岩であるが、空風輪（18）は裸岩がほぼ全体を覆い、空風輪（19）は裸岩が部分的に付着する。

石塔の形状では、空風輪（18~24）は全て下部に火輪と組み合う突起があり、全体に丸みをもち中間の彫りが深い。水輪（25~27）は上下に突起がある。水輪（27）は肩が張る。地輪（28~30）は全て上部にはぞ穴を作るが、厚さは厚いものから薄いものまで様々である。これらの中で、元の位置を保っている可能性があるのは地輪（31）1点のみである。

個々の墓の形態などは中世墓群一覧表、藏骨器などは遺物観察表にまとめた。

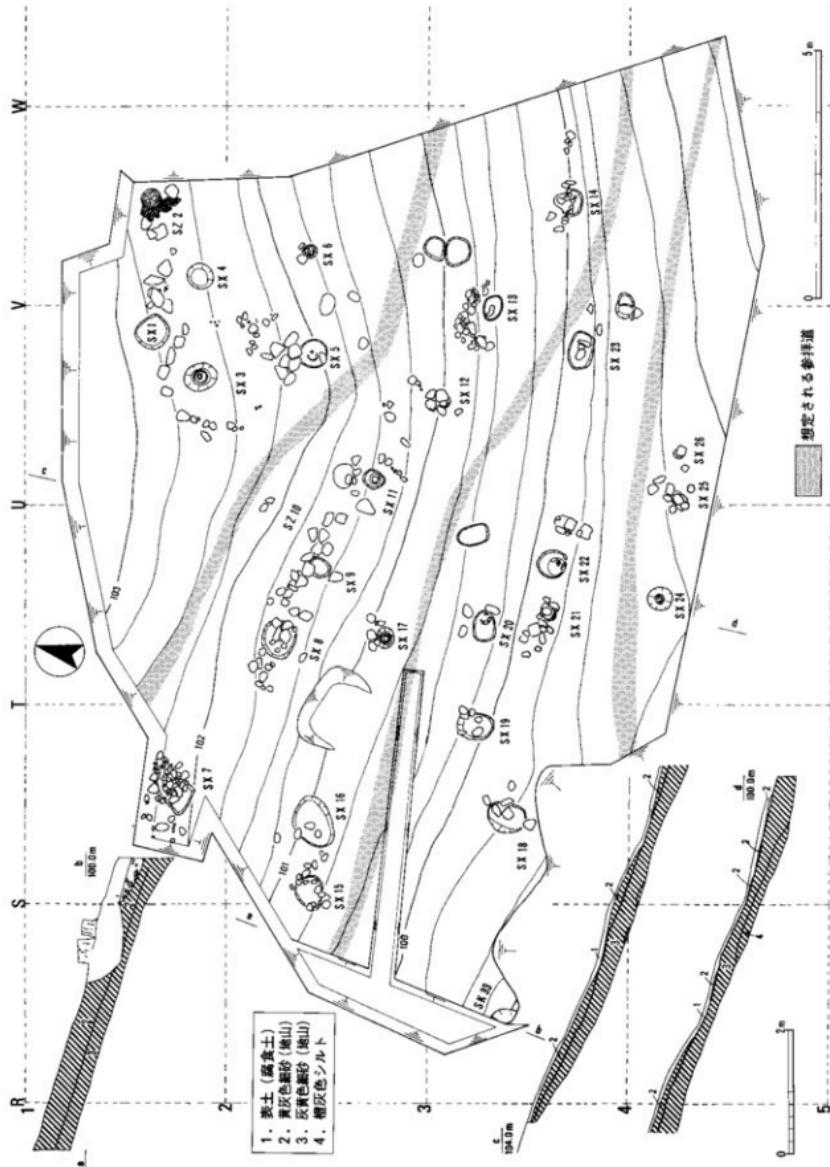
## 2. 結語

検出した中世墓の構造は以下の三つに分類できよう。

A. 30cm大の石を使って方形に区画し、区画内に土壇を掘る。土壇に、火葬した骨が入った壺や甕をこね鉢等で蓋をして納める。そして、区画内を盛土した後、土壇の上には平らな石を置く。

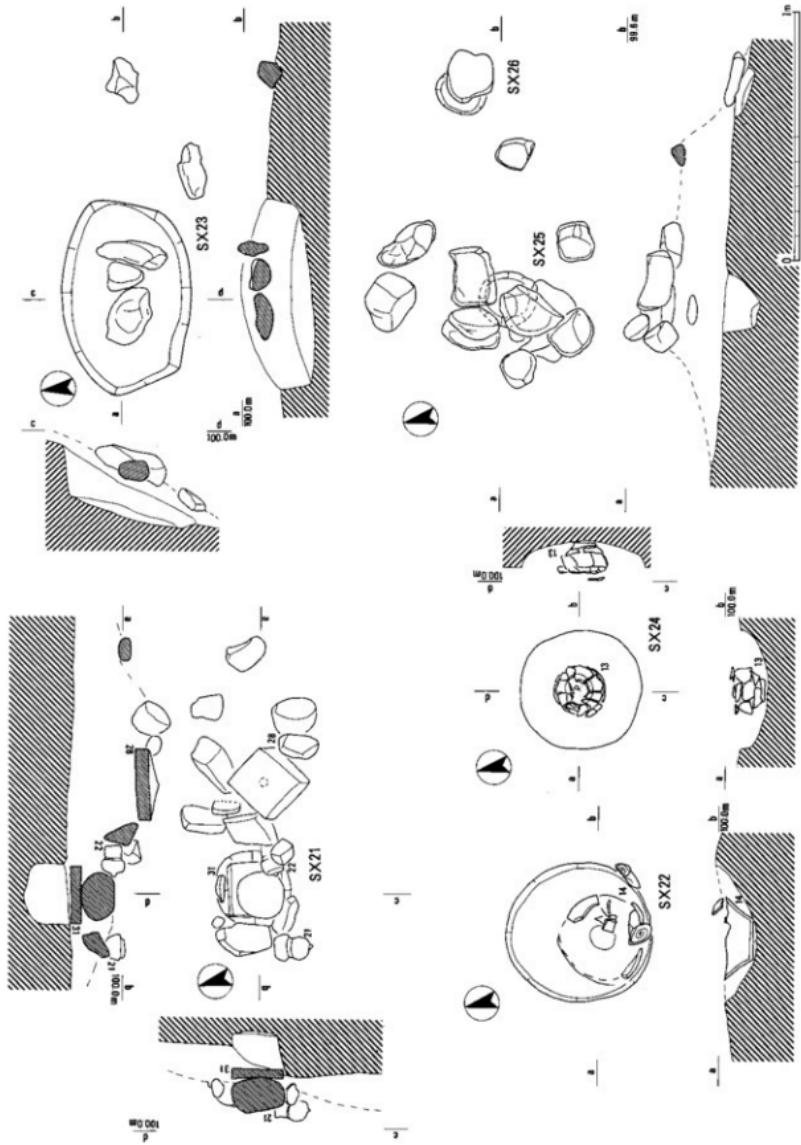
B. 30cm大の石を使って方形に区画し、区画内に土壇を掘る。火葬した骨を、おそらく木製の藏骨器に入れ山茶椀で蓋をして、土壇に納める。そして、区画内を盛土した後、土壇の上には平らな石を置く。

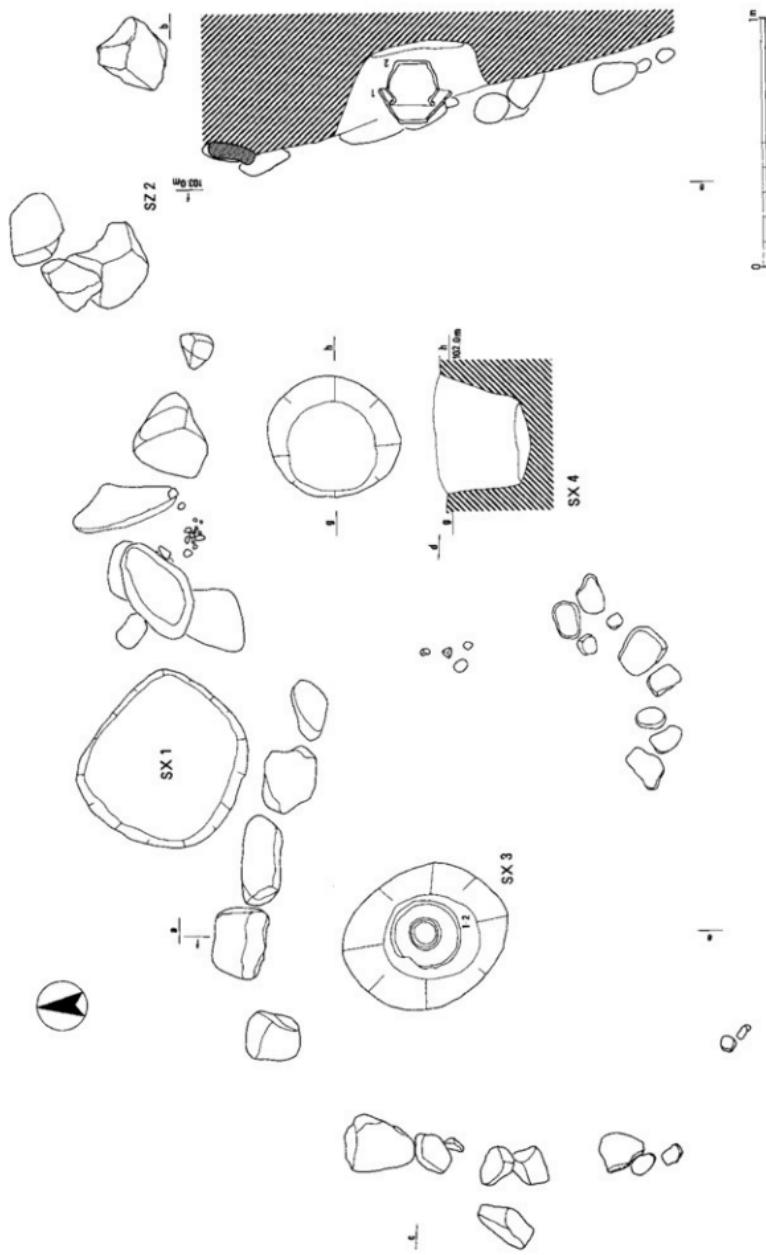
C. 30cm大の石を使って方形に区画し、区画内に土

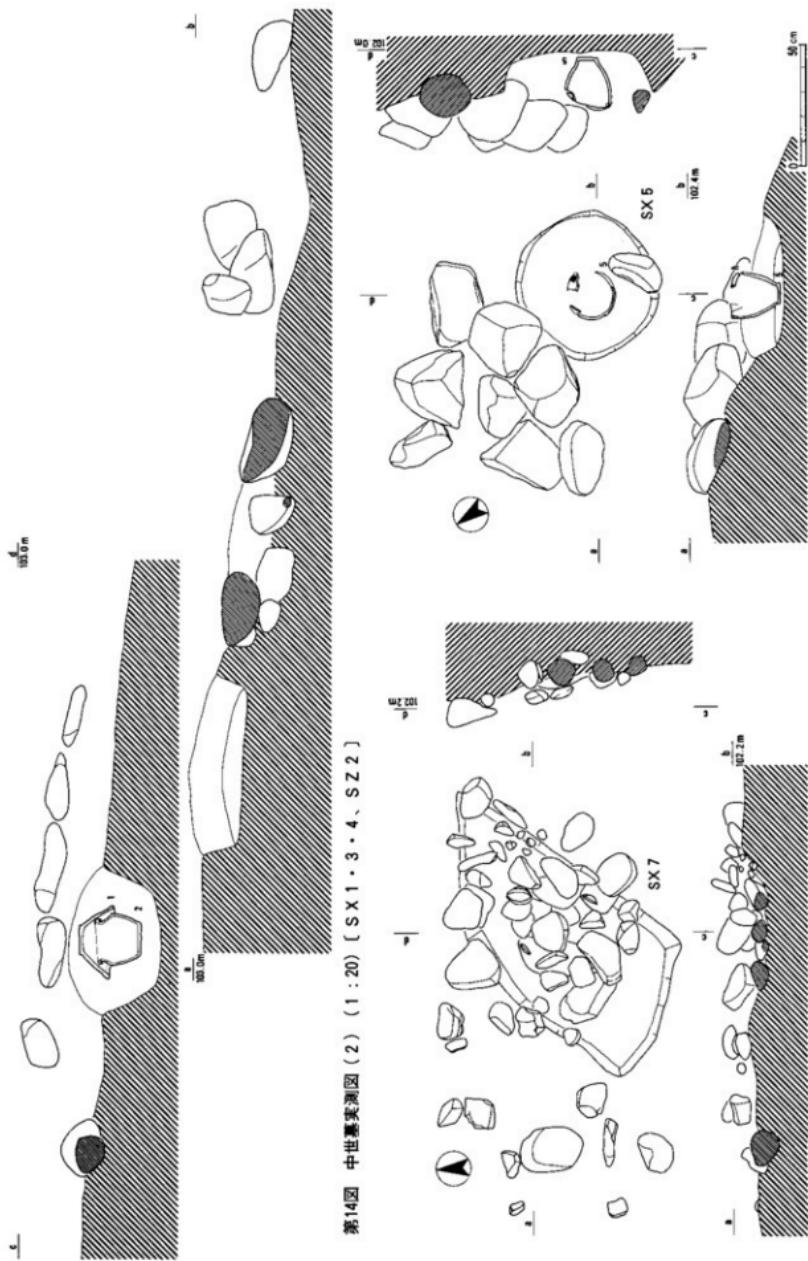


第12図 連続平面図（1：100）と土層断面図（1：80）

第13図 中世墓実測図(1) (1:20)[SX21~26]

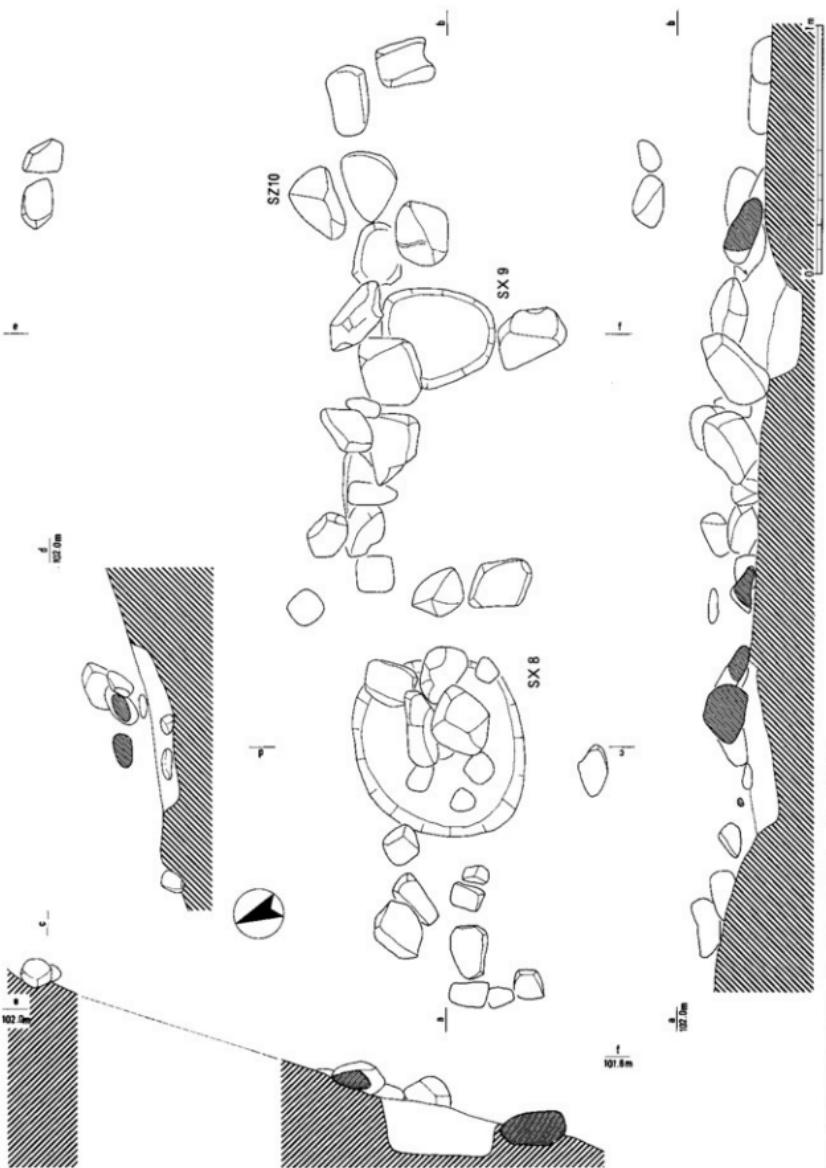






第14圖 中世寒武系圖(2) (1:20) [ SX1·3·4、SZ2 ]

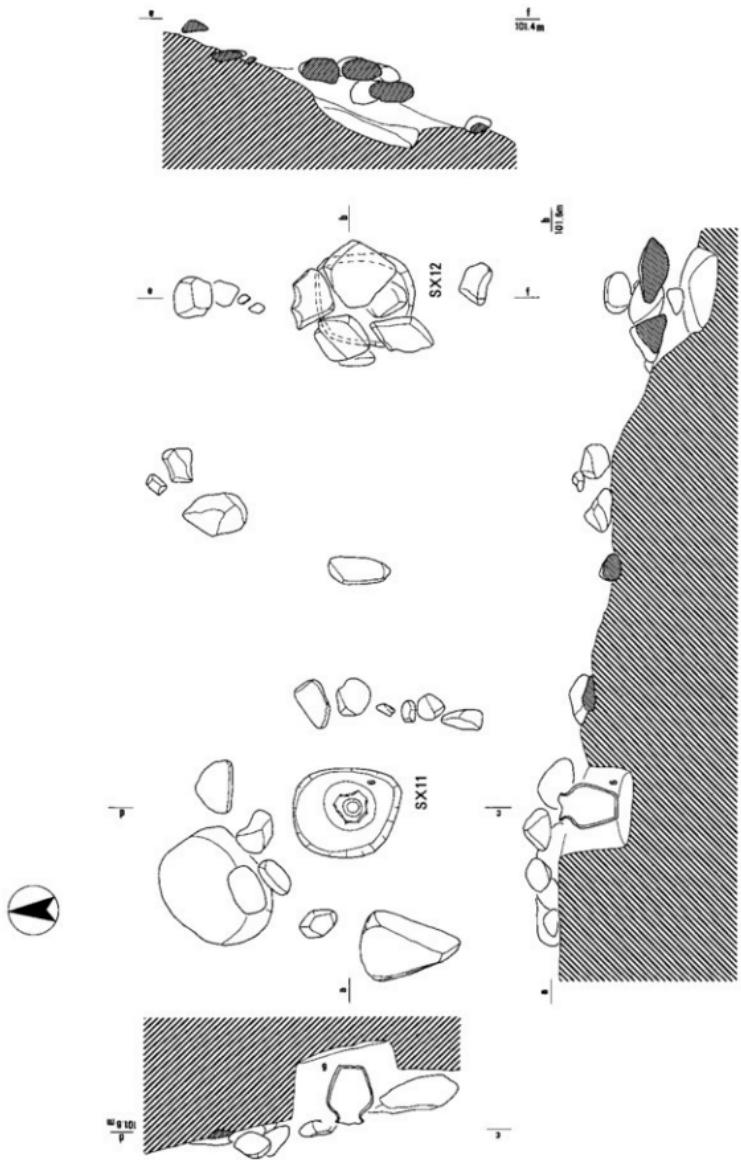
第15圖 中世寒武系圖(3) (1:20) [ SX5·7 ]



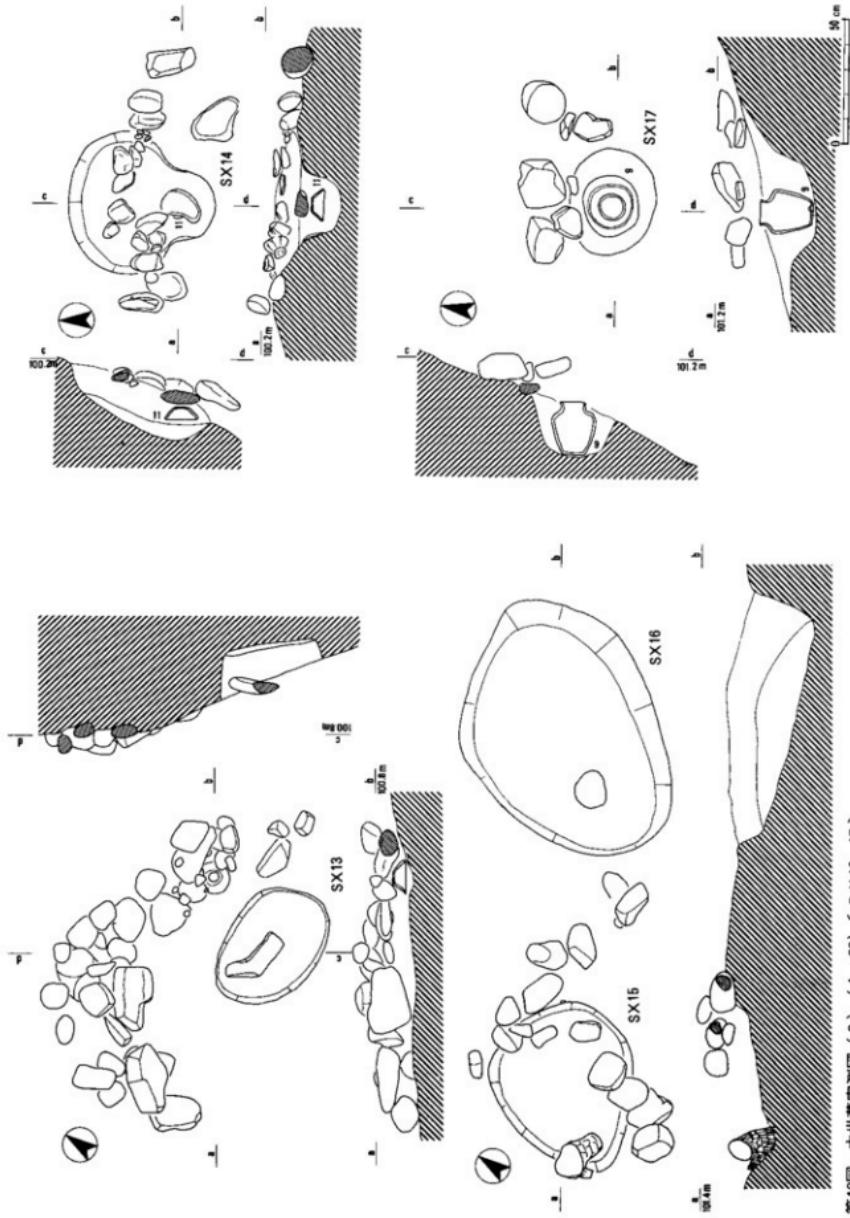
第16图 中世墓実測図(4) (1:20) [SX8・9、SZ10]

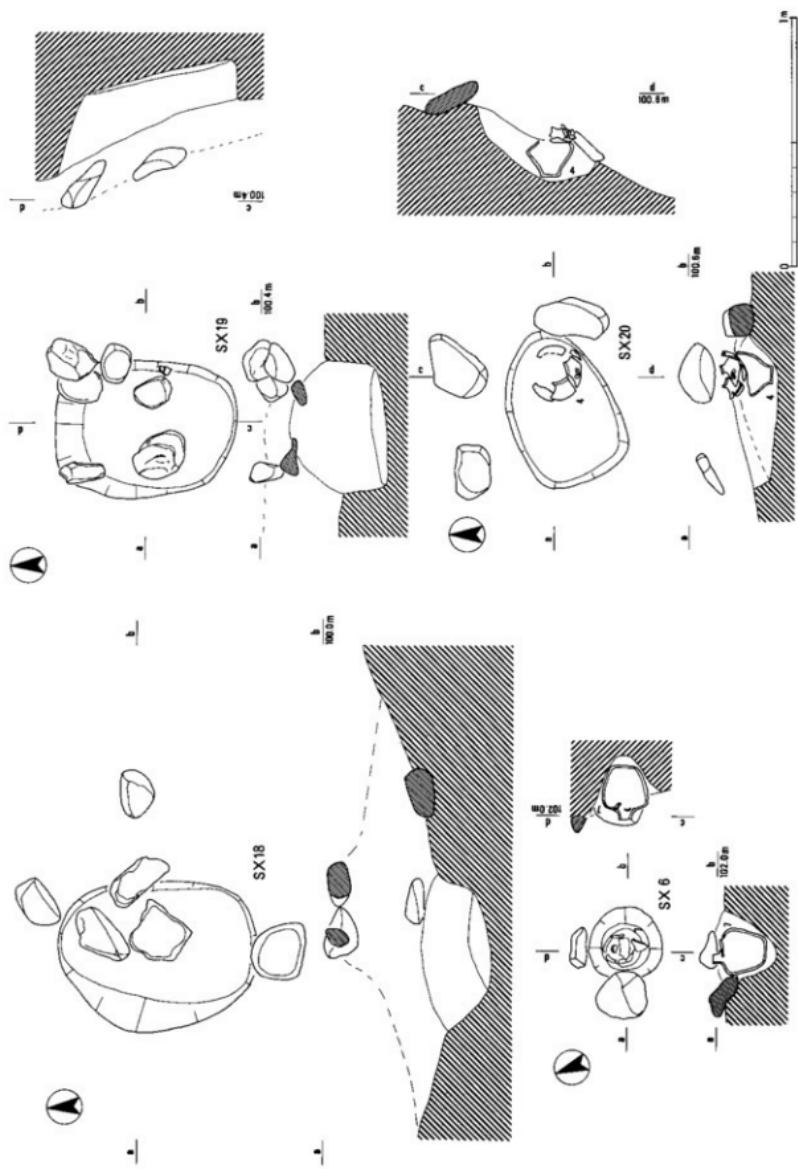
— 10.4 m —

第17図 中世墓実測図(5) (1:20) [SX11-12]



第18圖 中世墓実測図(6) (1:20) [SX13~17]

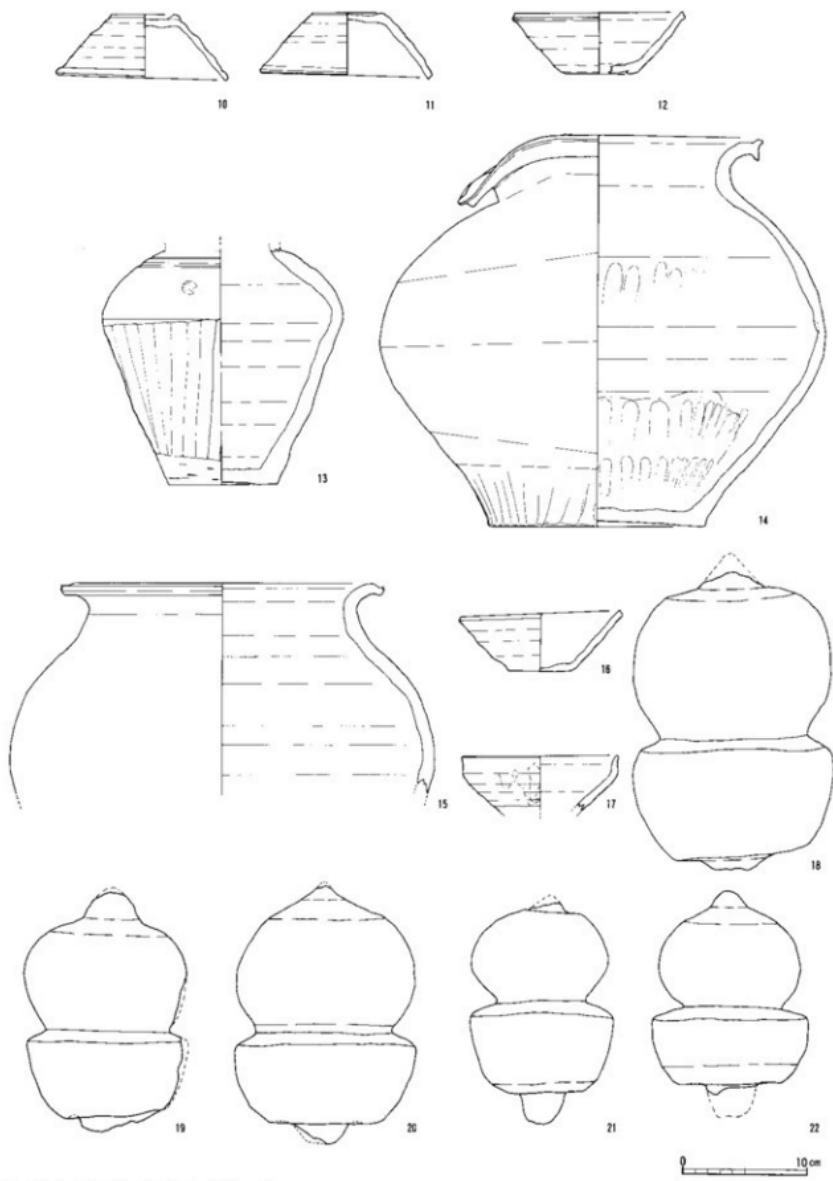




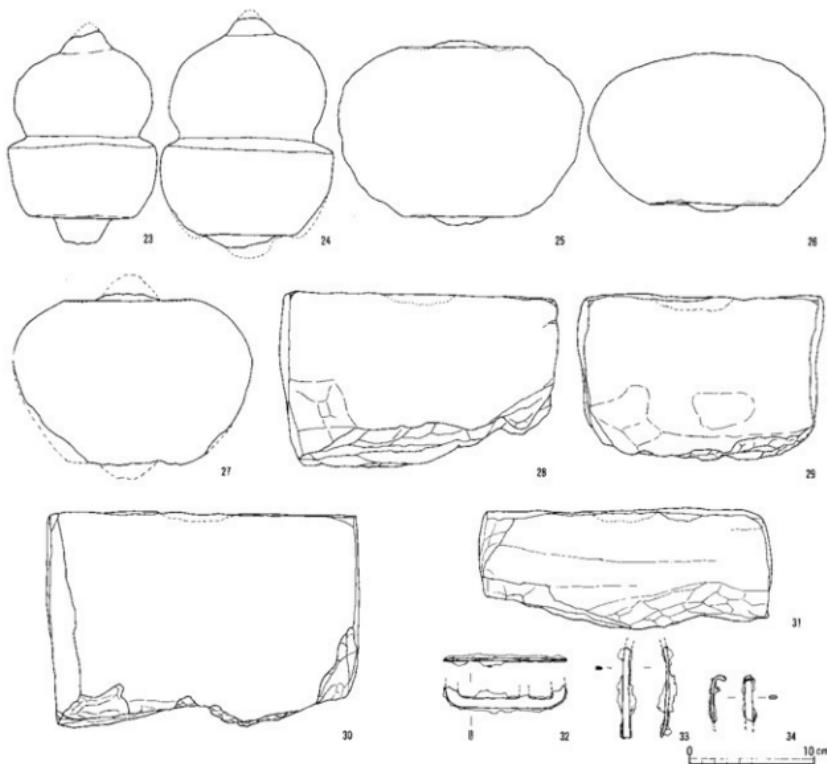
第19圖 中世層實測圖(7)(1:20)[SX6・18-20]



第20図 遺物実測図（1）（1:4）



第21図 遺物実測図(2) (1:4)



第22図 遺物実測図（3）（1：4）

遺物 番号	登録 番号	地 区	遺 構 （出土位置）	器 種	法 量(cm)		調 査 技 法 の 特 徴	色 調	施 土	残 存 度	備 考	
					口径	脚高 底径						
0 1	001-01	U1	S X 3	片口鉢	29.8	12.7	12.0	口：クロナデ・丸く削める、内：クロナデ、外：下サケズリ	乳灰色	1~3mmの石含む	口 1/7欠	直立に倒った？・13C前期
0 2	002-01	U1	S X 3	陶器甕	17.2	17.3	13.4	口：クロナデ・T字状外；上半割り縫ナデ・下サケズリ	乳灰色	1~4mmの石含む	完形	肩部にスタンプ印・14C末~15C前
0 3	003-01	V2	S X 2 0	片口鉢	31.4	—	—	口：クロナデ内・クロナデ外、下サケズリ	黄褐色	1~3mmの石含む	体の1/5	13C前期
0 4	004-02	T3	S X 2 0	四耳甕	8.5	22.9	7.5	口：折り返しが内・外、ナデ	茶褐色	1mm程の黄石含む	口 2/6欠	褐色の釉・13C
0 5	005-02	U2	S X 5	四耳甕	6.9	26.5	8.5	口：審覗内；折ササエ	褐灰色	0.5mm程の黄石含む	3/5	褐色の釉・14C前期
0 6	006-01	U2	S X 1 1	陶器甕	(12)	(23)	9.4	口：オキエ・ナテ外；下半覗方向にケズリ後ヨコナデ	褐色	1mm程の長石多く	口 2/3欠	褐色の釉・13C末~13C前期
0 7	006-01	V2	S X 6	陶器甕	10.4	22.4	8.8	口：折り返し内；斜面部オサエ外；横・縦のケズリ	褐色	1mm程の長石石英	口 4/5欠	肩部に自然釉付着・13C
0 8	007-01	S2	S X 7	陶器瓶	—	—	8.8	内：上半ハケメ、下半クロナデ 外：肩部にへうによる花紋	灰黄色	並	1/4	灰オリーブ色の釉・13~14C
0 9	008-01	T2	S X 1 7	陶器甕	10.2	8.1	21.4	口：垂れ出し、外、縫のケズリ後部分的に覗方向にケズリ	褐色	1~5mmの石含む	12辺方形	13C中・後期
1 0	009-01	U3	S X 1 3	山形瓶	13.5	5.0	5.5	口縁部下外縁：強いナデ痕跡外縁；赤きり痕	米白色	2~3mmの石含む	12辺方形	13C後期
1 1	004-01	V3	S X 1 4	山形瓶	13.7	4.9	5.3	口：角張る直壁外縁；赤きり痕	米白色	1~3mmの石含む	完形	13C後期~14C前期

第25表 遺物観察表

遺物 番号	登録 番号	地 区	遺 情 (出土位置)	器 種	法 量(cm)		調 整 技 法 の 特 徴	色 調	地 土	残 存 度	備 考	
					口径	鉢高						
1.2	057-03	T3	S X 2.2	山茶椀	13.8	5.0	6.0	ロクロナデ	灰白色	1~2mmの石英含	2/3	13C後期~14C前期
1.3	059-02	T3	S X 2.4	陶器壺	—	—	8.9	外：上部武縫、ハナメ状縫ぐすり、下部ハナメ×5本/	濃褐色	1~4mmの石含む	口のみ欠	肩部にスタンプ印・13C後期
1.4	010-01	T3	S X 2.2	陶器壺	24.6	31.3	16.9	口：丁字状内：垂れサニ・ヨコナメ外：下部カズリ	褐色	1~4mmの石含む	2/3	試まで確認困難・14C
1.5	011-01	T2	表土	陶器壺	26.0	—	—	口：ヨコナメ 外：上部ハナメ×2箇所ノタテ・下部ケツリ	褐色	1~3mmの石含む	1/7	内：粘土角上げ底・13C前半
1.6	006-02	T1	表土	山茶椀	12.5	4.7	5.0	口：角巻き内・外：ロクロナデ底部外面：あきら裏	褐灰色	1~5mmの石英含	4/5	13C後期~14C前期
1.7	007-02	U2	表土	天音基碗	12.4	—	—	ロクロナデ	褐色	1mmの表石含む	口の1/6	16C前期
3.2	019-03	V2	S X 6	鉄製品	長さ	9.6	現存巾	1.8	厚さ	0.2		
3.3	019-02	V2	S X 6	鉄製品	現存長	7.3	巾	0.6	厚さ	0.2	骨片付 木棺の表石含むか？	陶器壺（遺骨器）内
3.4	019-01	V2	S X 6	鉄製品	現存長	3.8	巾	0.65	厚さ	0.2		

第5表 遺物観察表

遺構	類型 ～A,B,C	土壙の 形態	土壙の規格(cm) (長×短×深)	葬法	副葬品	骨	藏骨器	方向	備考
SX 1	塚・石	C?	隅丸方	65×60×15	?	—	—	N 10° E	配石方形
SX 3	塚・石	A	楕円形	70×55×23	火葬	—	50代男	片口鉢・壺	N 10° E 配石方形・土壙上に石
SX 4	塚	C?	円形	55×50×33	土葬	土師器皿	小人	—	N 10° E? 配石？・炭化物
SX 5	塚・石	A	隅丸方	60×55×11	火葬	—	女性	四耳壺	N 25° W
SX 6	塚・石	A	円形	30×30×21	火葬	—	青年	壺	壺内に鉄製品
SX 7	石	A?	?	?	—	—	壺片	?	土壙？
SX 8	塚・石	C	隅丸方	70×70×10	?	—	—	N 19° E	土壙上に石
SX 9	塚・石	C	楕円形	45×40×14	?	—	—	N 19° E	
SX11	塚・石	A	楕円形	45×40×26	火葬	—	青年	壺	N 38° E 配石方形・土壙上に石
SX12	塚・石	C	楕円形	40×35×10	?	—	—	?	土壙上に石
SX13	塚・石	B	円形	12×12×4	?	—	微量	山茶椀(蓋)	N 20° E 土壙上に石 複数埋葬か？
		C	楕円形	54×37×15	?	—	—	—	
SX14	塚・石	B	楕円形	60×?×15	?	—	微量	山茶椀(蓋)	?
SX15	塚・石	C?	楕円形	70×60×10	?	—	—	?	土壙上に石
SX16	塚・石	C	楕円形	97×80×25	?	—	—	—	?
SX17	塚・石	A	隅丸?	43×35×25	火葬	—	成人人	壺	N 11° W 土壙上に石
SX18	塚・石	C	楕円形	80×60×17	?	—	—	—	?
SX19	塚・石	C	隅丸方	70×55×19	?	—	—	—	?
SX20	塚・石	A	楕円形	60×50×12	火葬	—	青年女	四耳壺・片口鉢	N 0°?
SX21	塚・石	(C)	円形	20×20×18	火葬	—	少 量	—	N 15° E 地輪の下に土壙
SX22	塚・石	A	円形	55×55×14	?	—	—	壺・山茶椀	N 12° E
SX23	塚・石	C	隅丸方	80×50×13	?	—	—	—	?
SX24	塚	A	円形	50×50×10	火葬	—	少 量	壺	?
SX25	塚・石	C	楕円形	17×13×14	火葬	—	小人	—	?
SX26	塚・石	C	円形	20×20×6	火葬	—	微量	—	?

第6表 中世墓一覧表

坑を掘る。火葬した骨を、おそらく木製の藏骨器に入れ、土坑に納める。そして、区画内を盛土した後、土坑の上には平らな石を置く。

従って、埋葬方法は、藏骨器等の埋置といえる。

供養塔には、14点出土した五輪塔が挙げられる。SX21は、土坑上に建てられていたと考えられる。しかし、それ以外のものについては、その原位置は不明である。

埋葬された骨については、以下の鑑定を得た。<sup>昭和</sup>

SX 3 の藏骨器に納められていた骨は、焼きむらはあるが、焼成温度は高い火葬骨である。部位は、全身であるが碎片化が著しい。四肢骨の関節部における石灰の沈着がみられることから、年齢は熟年後期（50代）と推定できる。性別は、後頭骨の外後頭隆起が著しく発達していることから男性である。

SX 5 の藏骨器に納められていた骨は、火葬骨で、部位は、全身であるが碎片化が著しく、骨量は少ない。年齢は、思春期前後と推定される。性別は、頭骨が薄く、椎骨が小さくきゃ奢であることから女性である。

SX 6 の藏骨器に納められていた骨は、火葬骨で、部位は、全身であるが碎片化が著しく、骨量は多くない。年齢は、思春期前と推定される。性別は不詳である。

SX11の藏骨器に納められていた骨は、火葬骨で、部位は、全身であるが碎片化が著しく、骨量は少ない。年齢は、思春期前後と推定される。性別は不詳である。

SX17の藏骨器に納められていた骨は、火葬骨で、部位は、全身であるが碎片化が著しく、骨量は少ない。年齢は、思春期前後と推定される。性別は女性と思われる。

SX20の藏骨器に納められていた骨は、火葬骨で、骨量は少ない。年齢は、思春期前後と推定される。性別は女性と思われる。

SX24の藏骨器に納められていた骨は火葬骨で、骨量はきわめて少ない。年齢・性別共に不詳である。

SX13・SX14の土坑中に納められていた骨は、極微量で、年齢・性別等の詳しいことは分からぬ。

SX21の土坑中に納められていた骨は、火葬骨である。骨量は少量で、年齢・性別等は不詳である。

SX 4 の土坑中に納められていた骨は、炭化はしているが、焼けていない。部位は、頭骨のみで、小人の骨である。性別は不詳である。

SX25の土坑中に納められていた骨は、焼けた痕跡はあるが、火力は弱かったと思われる。小人の骨である。性別は不詳である。

SX26の土坑中に納められていた骨は、焼けた痕跡はあるが、火力は弱かったと思われる。骨量は少量で、年齢・性別等は不詳である。

これらの結果から推量するに、小人骨は陶器製の藏骨器には入れずに葬ったと言えよう。

墓の年代を考えるにあたって、藏骨器による編年を墓の年代としてそのまま当てはめると、SX11が12世紀末～13世紀前半、SX 6・13・17・20・24が13世紀代、SX 7・14が13～14世紀代、SX 5・22が14世紀代、SX 3 が14世紀末～15世紀前半となり、約250年間存続したことになる。

しかし、墓の規模や被葬者の年齢・性別等が様々であり、調査区外を含めた中世墓の総数はおそらく数十基と考えられることから、墓の存続が 250 年間とは考えがたい。

従って、藏骨器の多くは、伝世品を使用したものであろう。

そうであるならば、墓の年代は14世紀を中心に營まれ、15世紀に入ると廃絶していったものと想像される。

参拝道については明瞭な検出ができなかつたが、西側の調査区外から SX15あたりに向かう通路があることや土層断面観察で黄灰色細砂（中世墓整地層・瓦包含層）がない部分が 3 か所あることと、等高線の状態や墓の配列状態等から判断すると第13図に示した参拝道が想定できよう。

【注】

- 1・山田 猛「一志郡嬉野町 天花寺廢寺」  
『昭和55年度県営施設整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会、1981年
- 2・森川幸雄「鈴鹿郡閑町出土の古瓦」『Mie history(Vol.4)』三重歴史文化研究会、1992年
- 3・竹内英昭「伊勢地方における官系瓦の分布」  
『斎宮歴史博物館 研究紀要二』斎宮歴史博物館、1993年
- 4・八賀 齐「伊勢国跡庵間にに関する基礎的研究」  
『研究成果報告書』、1992年
- 5・「三重県の地名 日本歴史地名体系24」  
平凡社1983年
- 6・瓦の量量化については、大脇漢「丸・平瓦の計量分析」「考古学における計量分析」帝塚山考古学研究所1992年の講義計測方を用いた。
- 7・瓦の名称・計測表等は、奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所 基準資料Ⅰ瓦編1解説』、鈴鹿市教育委員会「伊勢国分寺跡・国府跡2」1995年、向日市教育委員会「長岡京古瓦集成」1987年を参考にした。
- 8・前田清彦「三河国分寺系軒丸瓦をめぐって・成形台一本造り軒丸瓦の変遷とその系譜」  
『三河考古第8号』、1995年
- 9・鈴鹿市教育委員会「伊勢国分寺跡 - 第2次発掘調査概要報告」、1990年
- 10・鈴鹿市教育委員会「伊勢国分寺跡 - 第3次発掘調査概要報告」、1991年
- 11・鈴鹿市教育委員会「伊勢国分寺跡 - 尼寺跡推定地の調査」、1992年
- 12・鈴鹿市教育委員会「伊勢国分寺跡（5次）長者屋敷遺跡（1次）」、1993年
- 13・鈴鹿市教育委員会「伊勢国分寺跡・国府跡 - 長者屋敷遺跡はか発掘調査事業概要報告」、1994年
- 14・新田剛「伊勢国分寺跡の調査・伊勢国府跡の調査」『伊勢国分寺跡・国府跡』鈴鹿市教育委員会、1994年
- 15・新田剛「伊勢国府跡とその周辺の重圓文軒丸瓦」『第4回鈴鹿市埋蔵文化財展』鈴鹿市教育委員会、1994年
- 16・鈴鹿市教育委員会「伊勢国分寺跡・国府跡2」、1995年
- 17・中野晴久「生産地における編年について」  
『中世常滑焼をおつて - 資料集』日本福祉大学知多島総合研究所、1994年
- 18・秦好利氏（元中学校長）に御教示を受けた
- 19・中世墓一覧表は、三重県埋蔵文化財センター「三重の中世墓」1992年の形式に従って作成した。
- 20・江原昭善氏（柏山女子大學長）に鑑定及び御教示を受けた。
- 21・藏骨器の編年については、愛知県教育委員会「愛知県古窯跡群分布調査報告」（Ⅲ）1983年、（Ⅳ）1985年、藤澤良祐「山茶輪研

究の現状と課題」「三重県埋蔵文化財センター研究紀要第3号」1994年、井上喜久男「瀬戸編年図表」日本やきもの集成3、赤羽一郎「常滑編年図表」日本やきもの集成21980年、中野晴久「常滑窯」東日本における古代・中世窯業の諸問題』1992年を参考にした。

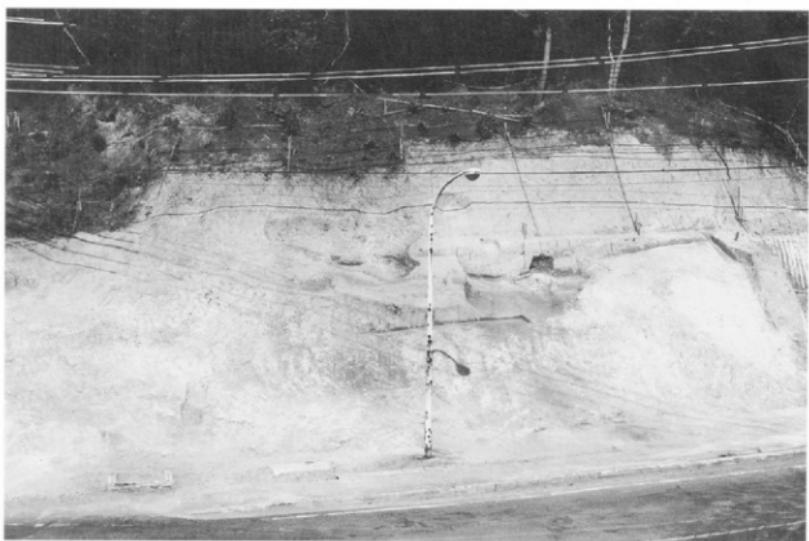
【参考文献】

- ・「三重県地名大辞典」角川書店1900年
- ・「鈴鹿 閑町史」、1977年
- ・河北秀実・野原宏司・田中喜久雄「牧瓦窯跡群」「近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告第1分冊2」三重県教育委員会、1989年
- ・奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅹ日本文』、1991年
- ・奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所基準資料Ⅱ瓦編2解説』
- ・倉田直純「伊勢寺廢寺」「伊勢寺廢寺・下川遺跡ほか」三重県埋蔵文化財センター1990年
- ・東海埋蔵文化財研究会岐阜大会実行委員会「古代仏教東へ—寺と窯—1. 寺院編」「第9回東海埋蔵文化財研究会岐阜大会」
- ・鈴木敏雄「三重県古瓦図録」、1933年
- ・森 郁夫「日本の古代瓦」、1991年
- ・森 郁夫「瓦」「考古学ライブラリー43」1986年
- ・財团法人大阪市文化財協会「難波宮址の研究第八」、1984年
- ・財团法人大阪市文化財協会「難波宮址の研究第九」、1992年
- ・矢田良明「日本の美術1陶鉢（中世編）」至文堂、1986年
- ・伊藤久嗣「椎山中世墓」「三重用水加佐登調整池開削跡発掘調査報告」鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会、1978年
- ・愛知県瀬戸市教育委員会・（財）瀬戸市埋蔵文化財センター「仏供田廃跡」「財團法人瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第2集」、1993年
- ・愛知県企業庁・瀬戸市教育委員会「瀬戸曉地区内離用地造成事業に伴う埋蔵文化財（緊急）発掘調査報告書」、1985年
- ・瀬戸市歴史民俗資料館「瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要V」、1986年
- ・磐田市教育委員会「一の谷中世墳群遺跡」、1993年
- ・羽曳野市教育委員会「古市遺跡群VI」「羽曳野市埋蔵文化財調査報告10」、1985年
- ・三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター「楠ノ木遺跡」「近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告第3分冊」、1991年
- ・伊藤裕章「多気遺跡群発掘調査報告」三重県埋蔵文化財センター、1993年

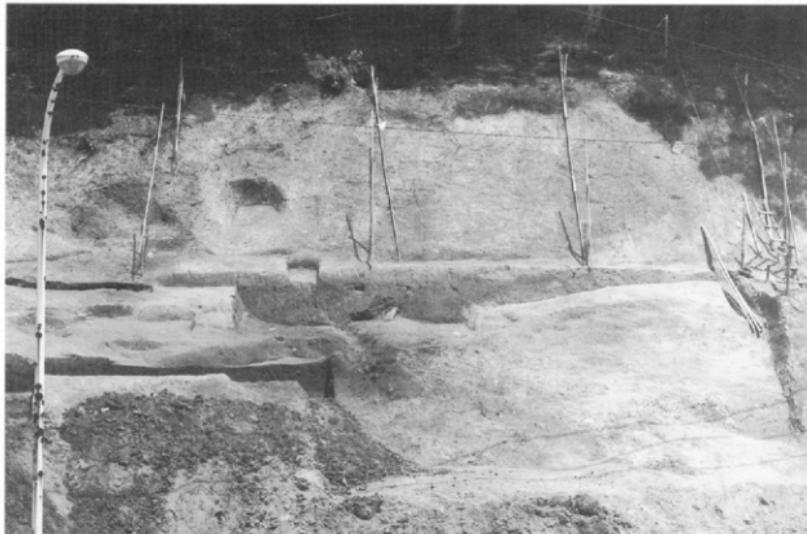




瓦窯跡調査前全景（南西から）



瓦窯跡調査後全景（西から）



1号窯前庭部と瓦溜（西から）



1号窯前庭部（西から）



中世墓調査前全景（南から）



中世墓調査後全景（南から）

P L 4



P L 4



S X 3



S X 5 遺物出土状況（南東から）



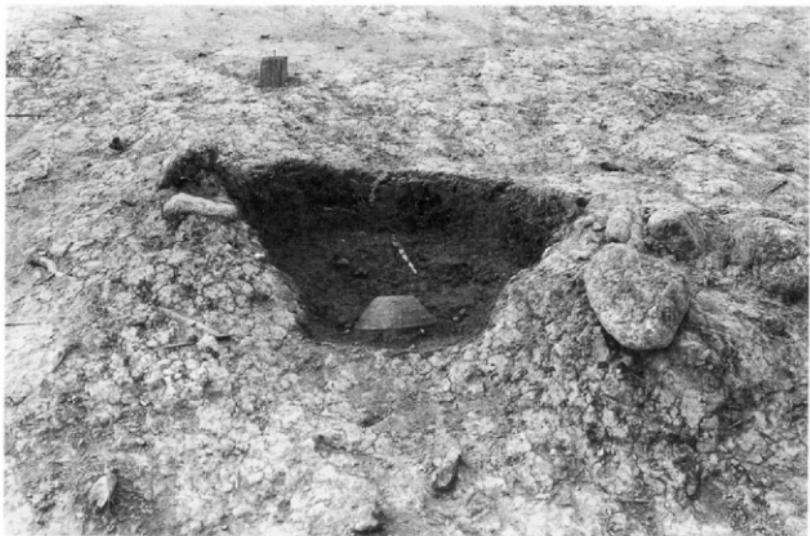
S X 6 遺物出土状況（北東から）



S X 11 遺物出土状況（南東から）



S X 13 遺物出土状況（南から）



S X14 遺物出土状況（南から）



S X17 遺物出土状況（南東から）



S X 20 遺物出土状況（南東から）



S X 22 遺物出土状況（東から）

P L 9



P L 9-1

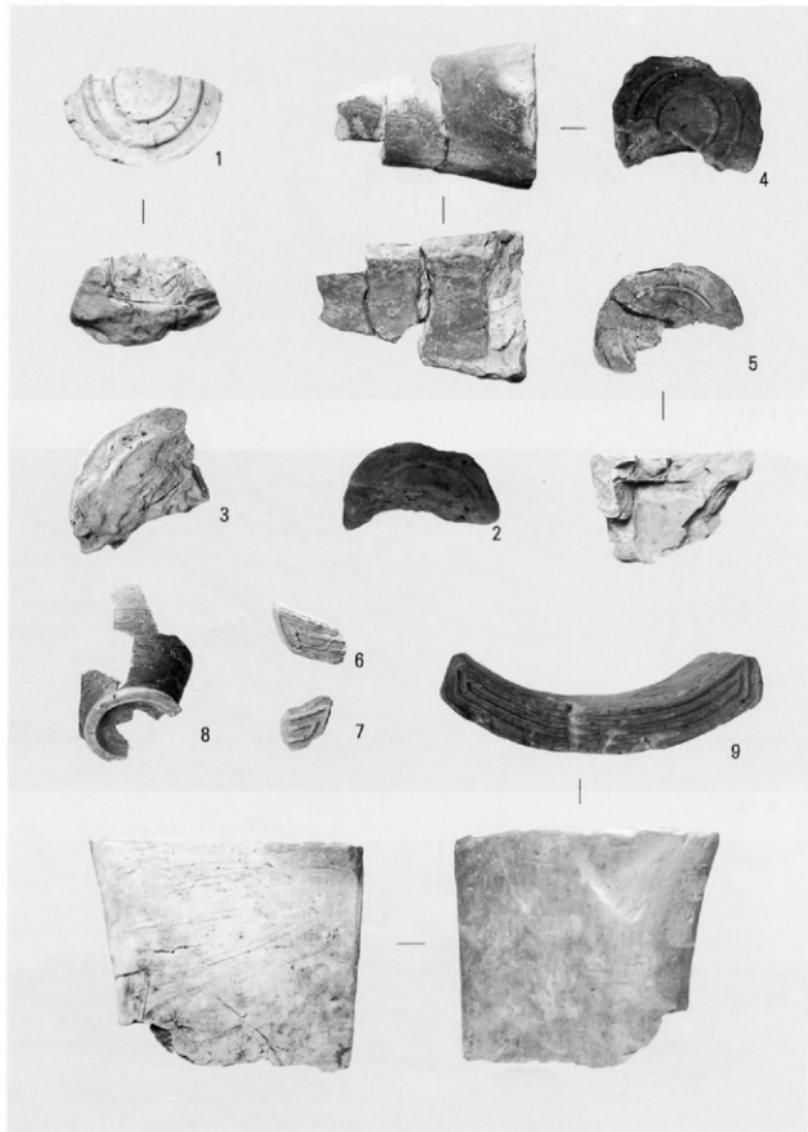


P L 9-2



P L 9-3

P L 9-4



切山瓦窑跡出土遺物（1）



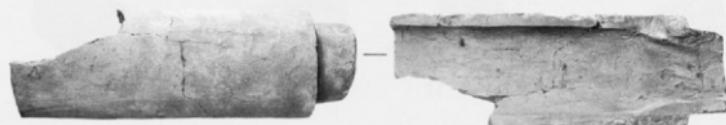
11



10



切山瓦窑跡出土遺物（2）



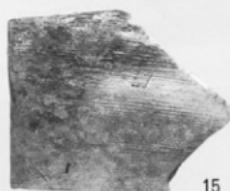
12



13



14

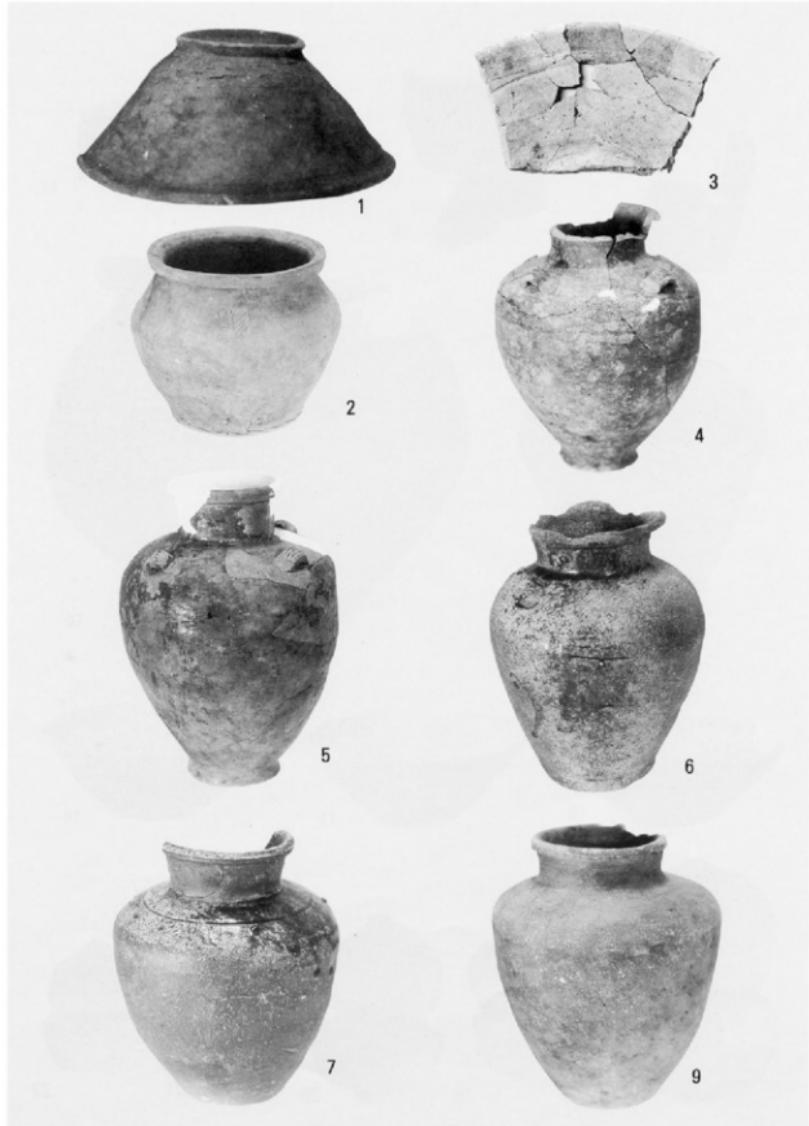


15

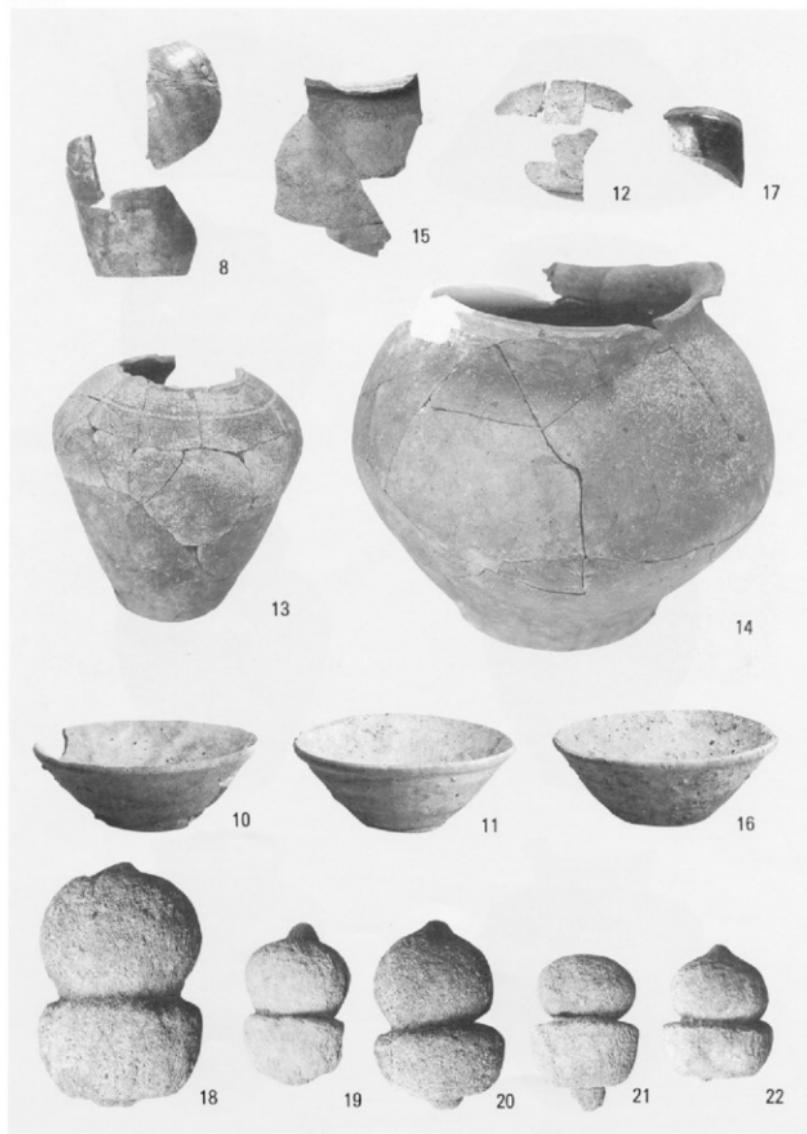


16

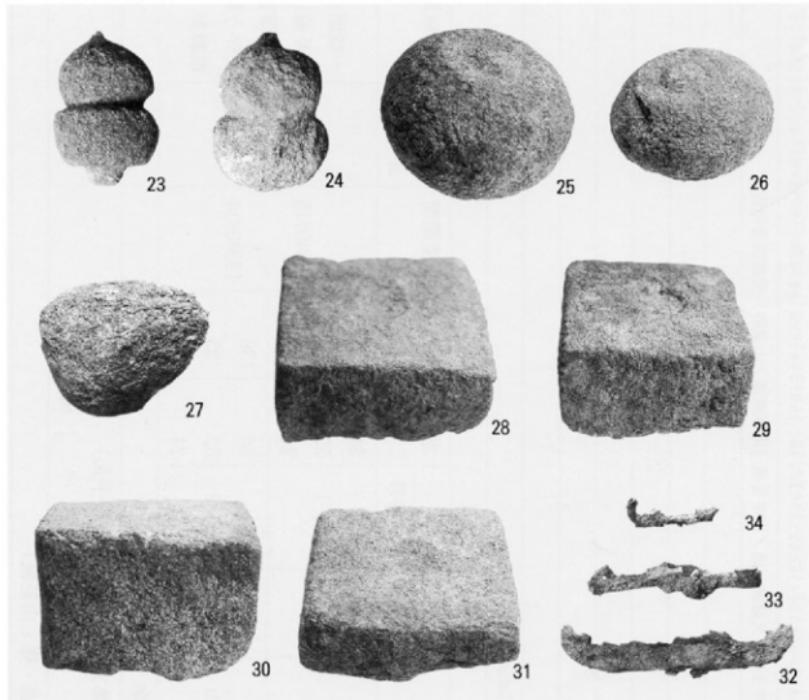
切山瓦窯跡出土遺物（3）



浦ノ山中世墓出土遺物（1）



浦ノ山中世墓出土遺物（2）



浦ノ山中世墓出土遺物（3）

ふりがな	へいせらくねじうがなこくじうにじゅごこせきいたーちんじんじかりりょうじうじうじもなきりやせうあうあうらのやくらうらのやまくらうせいほ(きうはくわらうらのやまくらうせいほ)はつくつうさきほにく							
書名	平成6年度一般国道25号関IC改良事業に伴う切山瓦窯跡・浦ノ山中世墓(旧萩原浦ノ山遺跡)発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	124							
編著者名	清水正明							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-03 三重県多気郡明和町竹川1503 Tel05965-2-1732							
発行年月日	1994年 9月14日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯 。' "	東経 。' "	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
きりやせうあうあう 切山瓦窯跡	三重県鈴鹿郡閑町大字萩原字切山	24361	41-1	34 52 24	23 11	19940715 ~	950	一般国道 25号線IC 改良事業 に伴う事 前調査
うらのやまちゅうせい 浦ノ山中世墓	三重県鈴鹿郡閑町大字萩原字浦ノ山	24361	41-2	34 52 24	23 7	19940914 ~		特記事項
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				
切山瓦窯跡	窯	奈良時代	瓦窯 瓦溜	瓦(重圓文軒丸瓦・重輪文軒平瓦) 須恵器				
浦ノ山中世墓	墓	中世	墓	陶器(壺・甕・山茶碗)				

平成 6(1994) 年 9 月に刊行されたものをもとに  
平成 19(2007) 年 6 月にデジタル化しました。

---

三重県埋蔵文化財調査報告124

切り山瓦窯跡・蒲ノ山中世墓（旧萩原裏ノ山遺跡）発掘調査報告

—鈴鹿郡閑町萩原・古厩—

1994（平成6）年 9 月

編 集 三重県埋蔵文化財センター  
発 行 光出版印刷株式会社  
印 刷

---